
くじびき勇者さま 外伝 誰が駄弁王だ！？

あきらたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くじびき勇者さま 外伝 誰が駄弁王だ!?

【Nコード】

N7369N

【作者名】

あきらたろう

【あらすじ】

HJ文庫から全11巻が出ている「くじびき勇者さま」の二次創作です。

原作第7巻135ページでメイベルを人質にしたジルを主人公にしました。

彼のような一般人の立場から「くじびき勇者さま」世界での社会の変化を書く予定です。

第一章 ラムース捕虜収容所（前書き）

突発的に思いついたので、書きました。

「ドラゴン教司教さま」に比べると地味な話になると思いますが、
よろしく願います。

第一章 ラムース捕虜収容所

サクラス王国連合帝国の加盟国同士である南アルテース連邦共和国と西アルテース公国の間で戦われた戦争、アルテース西南戦争が終盤に差し掛かった頃の事である。

ここは、南アルテースのラムースにある捕虜収容所である。

ここには西アルテース軍の捕虜が収容されている。

そこにある独房の一つには、一人の男がいた。

独房は鉄格子の小さな窓が一つあるだけで、ドアも頑丈な鉄扉である。

戦争捕虜は犯罪者ではないため、脱走しようとしないう限り、収容所内での行動は基本的に自由だ。

独房に閉じ込められるのは、収容所内で犯罪を犯した者だけである。

男は粗末なベッドに横になっていた。

すでに日は登っており朝になっていて、男は目が覚めていたが、男にはベッドから抜け出す気はなかった。

男は人生の全てを諦めたような顔をしていた。

「起きろ！ ジル・エルラブンダ！ 朝食だ」

警備兵が鉄扉の差し入れ口から食事の載ったトレイを入れた。

トレイには焼きたてのパン、目玉焼き、サラダが載っていた。

「おい、おい、今朝の食事は豪勢だな！」

ジルと呼ばれた男はトレイを受け取ると、目を見開いた。

「ここに叩き込まれてからは、堅くなったパンと塩水しか今までは、出なかったっていうのに……」

「そうか……俺の処刑が決まったのか……これは死刑囚への最後の食事というわけだな？」

ジルの絶望の声に、警備兵が呆れて答えた。

「何を妙な誤解してるんだ？おまえが罰を受ける期間が終わったから、食事が普通になったただけだ」

「なんだって！？俺があんな事をしたことの処罰は、どうなった？」

ジルは捕虜収容所の視察のために来た南アルテースの大統領である聖女メイベルの喉元に刃物を突き付け人質に取り、収容所からの解放を要求したのである。

聖女メイベルの魔法と勇者ナバルの剣にジルは呆気なく倒され、それ以来独房に閉じ込められているのである。

「聖女さまに問い合わせたんだが、収容所内での規則によって処分してくれることだ」

「おまえは刃物を人に突き付けたが、人を傷つけたり、殺したりしたわけではないからな。独房に一定期間閉じ込められる罰で処分は終了だ」

「俺は聖女に刃物を突き付けたんだぞ。それなのに、これだけで罰は終わりなのか？」

ジルの驚きに警備兵が答えた。

「政府や軍の上の方では、おまえに厳罰を下す意見もあったそうだが、肝心の聖女さまがその気がないそうだ」

「聖女が?……」

「さっさと、飯を食ってくれ、食い終われば独房から出るんだ」

朝食後、独房から出たジルは、捕虜収容所の光景に驚いた。

独房に入る前は木造の宿舎が並び、大勢の西アルテース軍の軍服を着た男達がいた。

木造の宿舎はそのままだが、西アルテース軍の男達の人数は前に比べて少なくなっており、それに加えて明らかに軍人でない人間が多数いた。

服装から見て、西アルテースの民間人のようだった。

「あれは何だ？」

ジルは近くの松葉杖をついている捕虜に尋ねた。

「ああ。聖女さまの計らいで、西アルテースから来た、ここにいる捕虜達の家族だ」

「聖女の計らい？」

「俺たちみたいにケガや病気で帰れない者の家族には、見舞えるように無料乗車券や宿泊場所の手配とか、聖女さまがしてくれたんだそう。それで南アルテースの支配下に入って、鉄道の開通した町から、ああやって家族が来ているんだ」

「帰れない者がって……じゃあ。すでに西アルテースに帰った捕虜がいるのか？」

「そうだ。この戦争はもう一方的に南アルテースが押していて、南アルテースの支配下になった町からは、西アルテースは徴兵が不可能になるから、帰って良い事に聖女さまがしたんだそうだ」

ジルが敵の兵士達に対する扱いとは信じられないで、呆然としていると警備兵が近づいて来た。

「ジル・エルラブンダ。収容所副所長のミレスさまがお呼びだ」

ジルは警備兵に連れられて、副所長室に向かった。

副所長室の中には、立派な軍服を着て、胸にいくつもの勲章を下げていた。見た目は三十歳代半ばの肥満体の男がいた。

その男が副所長のミレスである。

副所長は机に座っており、ジルに向かいの椅子に座るように、身振りうながした。

ジルが座ると、副所長は口を開いた。

「我が輩の事を、覚えているかね？」

ジルは、うなづいた。

「この副所長で、俺が調理場で聖女にナイフを突き付けた時に、そこにいたろ」

「その通りだ」

ジルは、いささか投げやりに答えたが、副所長に気分を害した様子は無かった。

ジルは、さらに投げやりな態度になった。

「副所長さまが、わざわざ呼び出すということは、聖女の気が変わって、やっぱり俺を処刑することにしたのか？」

副所長は軽く苦笑した。

「そうではない。むしろ、そちらにとって良い話だ」

副所長は机の引き出しから、一通の封書を取り出した。

宛名には「ジル・エルラブンダ」差出人の名前には「レビー・エル

ラブンダ」と手書きで書かれている。

「妻からだ！」

ジルは大喜びで、手紙を取り出すと読み始めた。

「ジル。あなたの出した手紙は、ちゃんと、奥さんの所に届いているぞ」

「あの家族に手紙を出すことを認めるという話は、本当だったのか！」

独房に入っている時に、その話を聞いて、ジルは半信半疑だったが妻に宛てた手紙を書いたのである。

「そうだ。捕虜達に手紙を出すことを認めたのは、聖女さまのお計らいだ」

「また。聖女の計らいか……」

ジルは独房を出てから何度も「聖女のお計らい」を聞くので、敵の捕虜に対するものとは思えない待遇にむしろ呆れるぐらいであった。

「すまんが、手紙の中身は検閲させてもらった。手紙によると、ジル。あなたは娘が生まれたばかりなのに軍に志願して入ったそうじゃないか、何故？ そんな事をしたんだ」

副所長の質問に、ジルは自身の過去の決断を後悔する表情になった。

「俺の家は、西アルテース公国の首都サンウーヌスから少し離れた

所で小さな食堂をやっている」

「サンウーヌスに向かう街道のすぐ脇にあって、旅行者相手に食事を出す店で、けっこう繁盛している」

「妻のレビーは近所の幼なじみで小さい頃から付き合っていて、二年前に結婚した」

副所長は疑問を顔に浮かべた表情になった。

「幸せな家庭というヤツじゃないか。何故？ 軍に？」

「何て言ったらいいのかな……」

ジルは自身の内心を他人に説明するための言葉を選んでいた。

「俺が小さい頃死んだ爺さんが始めた食堂なんだ。その後を今も元気が親父が継いで、その後を俺が継ぐ事になるだろう」

「爺さんは小さな食堂の厨房で一生働いて人生を終えた。親父もそうなるだろうし、俺もそうだろう」

「それに不満があるわけじゃないんだが……何か、別の世界が見たくなって軍に入ったんだ」

副所長は同意のうなづきを返した。

「気持ちに分かるな。我が輩の実家も小さな雑貨屋だ。親からは店を継ぐように言われていた」

「しかし、子供の頃に読んだ一世紀半前の王国連合統一戦争に書かれた絵本で、将軍に憧れてな。軍に入ったんだ」

ジルは副所長の肩や腕にある階級章を見た。

「副所長さんは、小さい頃の夢をかなえたんじゃないか？ けっこう高い階級にいるんだろ？」

副所長は少し後悔するような、ため息をもらした。

「軍に入って、戦場は絵本にあるような格好良いモノでも華やかなモノでもない事が分かった」

「それでも、南アルテースの内戦で、それなりに活躍して、階級も上がって、勲章も貰ったんだか……」

副所長は自分の鍛えられているとは思えない肥満体のたるんだ腹を指差した。

「今でこそ、こんな体だが、昔は筋肉質だったんだ」

「でも、内戦の時の戦傷の後遺症で前線勤務は無理になってしまったな。今は捕虜収容所の副所長をしているというわけだ」

「今回のような大きな戦争で将軍として指揮するのが夢だったんだが、かなわない夢になってしまった」

「人生は思い通りにいかないものだな」

「その通りだ」

ジルと副所長は、うなづき合った。

「ところで、副所長さん。俺を調理場の仕事に戻してくれないか？
独房に閉じ込められて分かった。俺は料理をする事が好きなんだ」

「さすがに刃物を使う仕事を任せるわけには、いかん」

「それに、ここに居る必要はもう無いぞ、帰れるぞ」

「帰れる？」

「まだ、聞いていないのか？我が南アルテース軍はサンウーヌスの
宮殿コスモス宮まで約五キロの所まで進軍した」

「そこまで、鉄道が開通したから、鉄道でサンウーヌスまで捕虜は
全員解放する事になった」

その日の昼近く、ジルは他の捕虜達と一緒に捕虜収容所の門の前に
ある鉄道の引き込み線の横にいた。

引き込み線に列車が入ってきた。

列車は捕虜輸送用の専用列車では無く、ラクス発サンウーヌス行き
の一般営業の一番列車であった。

三等車の一両を捕虜専用になっている。

ジル達は列車の先頭の蒸気機関車の横を歩いて、自分達の乗る車両
に向かった。

歩いている途中、一等車の窓から見える中は、個室寝台になっており、マスコミが「動くホテル」と呼んだだけの事はある内装も豪華な物であった。

食堂車も一流レストランのような内装をしており、昼食時には少し早いが見るからに裕福そうな乗客が豪華な料理を食べていた。

「うまそうだな」

「あんな料理を一度で良いから、食べてみたいな」

捕虜達が食堂車を窓から覗いていると、監視のためについている南アルテースの兵士が注意した。

「こら！食堂車から離れろ！昼飯には、おまえ達には、ちゃんと弁当を配る」

監視兵の口調は穏やかなものであった。

今まで、鉄道で故郷に輸送された捕虜は騒ぎを起こした事は無いため監視の目も厳しくは無い。

ジル達が三等車に乗り、発車予定時刻通りに列車は発車した。

三等車には木製の椅子があるだけで、椅子にはクッションも無かったが、ジル達は西アルテースから南アルテースまで、ほとんど自分の二本の足で歩いて来たので、座っていれば目的地に着くだけで満足であった。

列車が昼食時に着いた駅のホームから列車の窓を通して、ジル達捕虜の弁当が運び込まれた。

弁当の中身はサンドイッチであった。

捕虜の一人がサンドイッチを口に入れると、うめき声を上げた。

「なんだこりゃ！パンが水っぽくて、グシャグシャで不味い！」

「俺達捕虜には、こんな不味いので、我慢しろという事かよ！」

「いや。そうじゃない」

怒りをあらわにする捕虜にジルは話した。

「このサンドイッチをつくった人間は弁当だということを計算に入れなかったんだな」

「どういうことだ？」

「このサンドイッチは、つくってすぐならば美味しい。」

「しかし、つくって時間を置くと、挟みである具材の水分をパンが吸って、パンがグシャグシャになって不味くなるんだ」

「駅で弁当を売るとしたら、調理してから時間が経過しても美味しい物にしなければならないんだ」

後に「駅弁王」と呼ばれる事になるジル・エルラブンダが駅弁に最初に関係した瞬間であった。

第一章 ラムース捕虜収容所（後書き）

ご感想をお待ちしています。

原作ではジルのフルネームは出てこないのですが、原作の第7巻171ページ10行目の「レビー・エルラブンダ」をジルの妻だという事にしました。

第二章 サンウーヌス その1

ジル達の乗る列車は、サンウーヌスに近づいていた。捕虜達は車窓から見覚えのある建物や山など、故郷の風景が見えるたびに喜びの声を上げていた。

「帰れる！本当に家に帰れるんだな！」

「父ちゃん。母ちゃん。もうすぐ会えるぞ！」

「娘！レビー！お袋！親父！もうすぐ帰るからな！」

ジルも列車の窓から叫んだ。

列車は、サンウーヌスの駅に到着した。駅と言っても、この時点ではプラットホームも駅舎もなく、草原に線路が敷かれているだけだ。その草原には大勢の人間がいた。その一部は事前に連絡を受けていた捕虜の家族だ。もちろん列車で移動して来た捕虜達を出迎えに来ているのである。

列車から降りた捕虜達と草原で待っていた家族は、お互いに名前を呼びながら駆け寄った。抱き合って喜びの声を上げている

ジルも自分の家族の姿を探した。しかし見当たらなかった

（誰も来ていないのか？）

そう考えているジルの耳に、聞き覚えのある声が入って来た。

「おい！ジル！わたしだ！わたしだ！ウルティモだ！」

ジルが声の方に目を向けると自分の父親と同年代の一人の男が立っていた。

「ウルティモさん。お久しぶりです」

男はジルの家の近所の住人でジルの父親とは友人であり、ジルも子供の頃からお互いに知っている。ウルティモは笑顔をジルに向けた。

「無事に帰って来られて良かったな。ジル。親父さんに頼まれて代わりに迎えに来たんだ」

「親父が？迎えに来られないという事は、親父が病気がケガでもしたのか？」

ジルが心配そうな表情をしたのに対して、ウルティモは笑った。

「安心しろ。そうじゃない。親父さんもお袋さんも奥さんもみんな元気だ。ただ仕事が忙しくて手が離せないんだ」

今度はジルは疑問の表情になった。

「忙しい？うちの食堂そんなに流行っていたか？」

「事情は複雑でな……わたしの荷馬車で悪いが、乗り物を用意してある。家まで送るよ」

ジルとウルティモは荷馬車の置いてある場所まで歩く事にした。そ

ここでジルは大勢の人間が、草原の駅から約五キロ離れたコスモス宮まで長蛇の列をつくって進んでいるのに気づいた。

コスモス宮は、西アルテース公国の公王であるビーズマス卿の居城である。

「ウルティモさん。あの人達は何をしに、コスモス宮に向かっているんですか？」

「ああ。あれが、ジルの親父さんの仕事が忙しくなった原因だ」

「あの人達が、どう関係するんです？」

「詳しい話は、荷馬車に乗ってからにしよう」

二人が荷馬車の馭台に乗り、ウルティモが馬を操って出発した。

「それで、ジル。疑問に答えるが、長い話になるんだが……」

コスモス宮に向かっている大勢の人達の目的は、西アルテース公国の公王ビーズマス卿への抗議の座り込みである。南アルテースに占領された都市の方が繁栄していて、西アルテースの方が沈滞している事に鉄道で短時間に移動が可能になったため、多くの市民が知ることになった。更に、ビーズマス卿が聖女メイベルに対する個人的な勝手な逆恨みで戦争を起こした事が西アルテース市民の間にも広まった。

西アルテース市民は、このままビーズマス卿の支配下で暮らす事を拒否したのである。

そのための抗議の座り込みである。

「あの鉄道というヤツが開通して、今までサンウーヌまで数日かかった所から数時間で来られるようになったからな。座り込みの人数は今じゃ、十万人近くになっているそうだ」

ジルは、まだ疑問が解けなかった。

「ウルティモさん。それと俺の実家の食堂が忙しくなったのと、どう関係するんです？」

ウルティモは笑って答えた。

「鈍いやツだな。ジル。サンウーヌスにいる人間が普段より十万人増えているんだぞ、食い物も十万人分余計に用意しなければならないんだ」

ジルは、ようやく疑問が解けた。

「俺の実家の食堂でも、座り込みの人達用の食事を作っているということですか？」

「その通りだ。実はこの荷馬車はジルの親父さんが作った弁当を運んだ帰りなんだ。もちろん。親父さんの食堂だけでは無く、近隣の食い物屋は皆大忙しだ」

ジルはウルティモの家が荷馬車での運送屋をしていることを思い出した。しかし、ウルティモは数年前に隠居して息子に後を継がせたことも思い出した。

「ウルティモさん。息子さんは、どうしたんですか？」

ウルティモは顔をうつむかせて、泣いているような表情になった。

「馬鹿な息子だよ。荷馬車一台の小さな運送屋で一生過ごすのは嫌だと、広い世界を見るんだと言って、軍に志願した」

ジルは似たような気持ちで軍に志願したため、ウルティモの息子には共感できた。しかし、戦場で実戦を経験して、そんな生易しいモノではない事がジルには分かった。今では、軍に志願した事をジルは後悔していた。

ウルティモは話を続けた。

「息子は戦場で大ケガしてな……」

ウルティモの暗い表情から、ジルは最悪の事態を想像した。

「命に別状は無く、今はカルパナの捕虜収容所にいる！」

ウルティモは一転して、明るい表情をジルに向けた。ジルはウルティモが冗談を言っていた事に気づいた。

「ちょっと！ウルティモさん！タチの悪い冗談はやめて下さいよ！」

「ハハハ、悪い。悪い。一時は政府から全員戦死したとの通知があったな。教会で合同葬儀をしたほどだったからな。手紙が届いて、無事に生きていると知ってから、嬉しくてたまらなくてな」

ジルは驚いた。

「戦死の通知？合同葬儀？そんな事になっていたんですか？」

ウルティモは、うなづいた。

「ああ。ジル。お前の奥さんのレビーさんなど合同葬儀が開かれた礼拝堂で生まれたばかりの娘さん抱えて、途方に暮れてたぞ」

それを聞いて、ジルの家族への罪悪感は大きくなった。

「ウルティモさん。戦争も軍隊もこりごりだ。俺は親父の食堂を継いで地道に暮らす事にするよ」

「わたしの息子も妻からの手紙によると似たような事を言っていて、運送屋を継ぐとのことだ」

「ウルティモさんの奥さんからの手紙？ウルティモさんの奥さんは、今どこにいるんですか？」

ジルの疑問にウルティモは答えた。

「南アルテースのカルパナの捕虜収容所近くの教会の宿泊施設にいて、収容所にいる息子を見舞いに行っている。わたしも行きたかったが、仕事を休むわけにはいかなくてな。南アルテースの聖女メイベルさまが、息子みたいにケガや病気で帰れない捕虜の家族には、見舞えるように鉄道の無料乗車券や宿泊場所の手配をしてくれたんだ」

「ああ……その話は前にも、聞きましたね」

「聖女メイベルさまは、聖女の称号にふさわしい。素晴らしい人物

のようだな!」

ウルティモはメイベルの事を称賛すると、目をジルに向けた。

「ところで、ジル。南アルテースでは、聖女さまのお姿を拝見したりは、しなかったのか？」

「俺のいたラムースの捕虜収容所に視察に来ました」

「ほお。それはすごいな。どんなお方だった？聖女さまは？」

「どんなど、言われても……」

ジルはメイベルにした事を思い出して、言葉に詰まった。

ウルティモは黙り込んだジルを誤解した。

「まあ。視察に来たのなら、遠くから一目見たぐらいだろうからな。それだけで、どんなお人か説明できるわけないか」

「まあ。そんなトコです。ウルティモさん」

ジルは答えを誤魔化した。実際にはジルはメイベルに刃物を突き付けて人質にとっているのです、間近で接触しているのだが、メイベルを称賛しているウルティモに、それを言うわけにはいけないのでジルは、これ以後この話題に触れないようにした。

荷馬車はジルの家の前に着いた。家は平屋で街道に面した表が食堂、裏が住居になっている。ジルは荷馬車から降りると、裏の住居にある玄関に行き、扉に手をかけた。

（家族のみんなは、俺が無事に帰って来た姿を見たら、どんな反応するだろう？ 嬉し涙を流すかな？ レビーは俺を抱き締めてくるだろうか？）

ジルは扉を勢い良く開けた。

「だだいま！ みんな！」

扉の中の光景は、ジルが予想しなかった。あるいは予想すべきモノだった。

「急いで焼き上がった肉を詰めるんだよ！」

「野菜料理の出来上がり、まだなの？」

住居は弁当箱にできあがった料理を詰める作業場になっていた。作業をしているのはジルが見覚えのある近所の主婦達だ。

「あっ！ ジルさん。じゃないかね」

作業している主婦の一人がジルに気がついた。

「ジルさんも、帰って来たのなら、早く厨房に行って手伝っておくれよ」

ジルが厨房に向かうと、父親と母親が忙しく調理をしていた。父親はジルと目を合わせると、喜ぶでもなく無愛想に自身のアゴの先を厨房の奥に振った。それは、ジルが子供の頃からの「手伝え！」という合図であった。

「親父。お袋。レビーと娘は、どこだ？」

ジルの質問に母親が答えた。

「レビーさんと孫は近所の家にいるよ。家全部を弁当作りに使わなきゃならないから、孫を生んだばかりのレビーさんに仕事させるわけにはいかないからね。弁当作りが終わる夕方には戻って来るよ」

予想外の家族の対応にとまどっていたジルは、ここで冷静になって厨房でつくられている料理を見た。

「親父！そんなモノつくっているのか！？よく客から文句来ないな？」

「どういうことだ？ジル」

ジルは父親のつくっている料理が弁当としては時間がたつと不味くなるモノをつくっているのに気づいた。この食堂は街道を徒歩や馬車で移動する旅行者に温かい食事を提供する店のため、大量に弁当をつくった経験が今まで無かったのである。

「こんなモノで、コスモス宮で座り込みしている人達から金取ったのかよ！」

「いや、あの人達からは金は貰っていない」

「まさか、無料で弁当配っているのか？」

「そんなわけではない。代金はクリプトン卿から貰っている」

「クリプトン卿が？何で？」

「わしも理由は知らん。だが毎日クリプトン卿の使いの人が来て、代金を置いていくんだ」

これにはジル達の知らない事情があった。クリプトン卿は帝国議会の終身執政幹部議員であり、西アルテースの代表議員である。そしてビーズマス卿の失脚を目的とするグループのリーダーを今は秘かにしている。

コスモス宮の座り込みそのものは市民達の間から自然発生的に行われたのだが、クリプトン卿は市民達の座り込みを長期間継続させるため食事を提供したのである。費用はクリプトン卿が西アルテースの複数の大商人に交渉して出させている。経済的にも西アルテースを混乱させたビーズマス卿を大商人達も見限っており、クリプトン卿に協力した。

「なるほど、座り込みしている人達にとっては無料だから文句が来なかったんだな。でも、親父。これは客に食わすモノじゃない」

父親はとまどった。

「じゃあ？どうすれば……」

ジルにとっては自分が幼い頃から料理を厳しく教えて、料理については何でも知っているように感じていた父親がとまどっているのが不思議に感じた。しかし、父親にとって未経験の事態に、今こそ、自分が力にならねばならぬと決意した。

「親父！俺に任せてくれ。捕虜収容所じゃ、大量の食事を俺はつくったんだ！」

ジルの後の駅弁へと繋がる弁当作りが始まった。

第二章 サンウーヌス その1（後書き）

ご感想をお待ちしています。

第三章 サンウーヌス その2

コスモス宮の周りで約十万人の市民が抗議の座り込みをしていた。

時刻はちょうどお昼時だった。

市民たちは配られた弁当を食べようとしていた。

（無料で貰っているんだから、仕方ないが不味いんだよな。どの弁当も）

一人の男が弁当箱を開けた。中身は俵形になっている炊いたご飯とウサギ肉の唐揚げ、野菜炒めだった。

男は味は全く期待せずに、ただ空腹を満たすのが目的で弁当箱の中身を口にした。

「うおっ!？」

その男が口にした途端に上げた声に、周りの人たちは注目した。

「美味しい! 何故だ? 何故? 冷めた弁当がこんなに美味しいんだ?」

この男には分析することはできなかったが、弁当には様々な工夫がされていた。

ご飯は時間が経過してもグショグショになったりしないように固めに炊いてあり、俵形にしてある。ウサギ肉の唐揚げと野菜炒めは、冷めても美味しいように計算して調理している。

弁当箱そのものにも工夫がしてあり、ご飯の水気や、おかずの汁気が混ざらないように仕切りが設けてある。

（よしっ！客の反応は、良いぞ！）

その光景を見ていたジル・エルラブنداは、内心で喝采を上げた。

その弁当を調理したのは、もちろんジルである。食べた人の生の反応が見たくて、今日は自分で弁当を配りに来ていた。

前日にサンウーヌス市内では暴動が起きたので危険だとは思ったが、一刻も早く食べた人の反応が知りたかったためコスモス宮を囲む市民たちの中に来ていた。

（さて、これからどうしようか？）

ジルは自分の昼食用に一つ残しておいた弁当を持って、周囲を見回した。

コスモス宮の周りには抗議のために続々と人の列が、途切れることなく続いている。

（この人混みの中から出るのは時間がかかるな）

そう思いながら、弁当を食べるために、どこか腰を下ろせる場所を探すために、ジルは歩き始めた。

しばらく歩いたが、どこも人がいっぱい、足の踏み場も無いほどで、ジルは腰を下ろす場所を見つけることができなかった。

ジルは弁当を食べられないまま、人混みに押されて、いつの間にかコスモス宮を取り囲む市民たちの最前列にいた。

ジルの目には、コスモス宮の正門前に、大砲が二つ並んでいて、砲門を市民たちに向けている。最初それを見た時はジルは驚いたが、素人目で見ても砲弾は装填されておらず。今はただ地面に置かれているだけだった。

（しかし公王さまは、どうするおつもりなのだろうか？）

ジルは北東を見た。ここから直接は見えないが、約五キロ離れたところまで鉄道が敷かれていて、そこまで南アルテース軍が進軍している。

（誰の目から見ても、もうこの戦争には勝負は着いている。南アルテース軍はコスモス宮に攻め込もうとするならば、いつでもできる。南アルテースが、それをしないのは俺たち西アルテース市民の力で公王さまに対する決着を着けさせたいという聖女さまのお考えがあるからだろう）

白馬に乗った將軍と向かいで座り込む市民たちの間でいざこざが起きようとしたが、守備隊長の機転で回避された。

上空からゴーツという音が聞こえてきた。

ジルが目を上に向けた。

（南アルテースの飛行機か……）

偵察のために何度もサンウーヌス上空を飛んでいるため、飛行機は南アルテースの市民にとっても見慣れた物になっていた。新聞報道で市民にたいする無差別爆撃はしないことを公表していたため、市民は安心して飛行機が飛んでいるのを見ていた。

宮殿の上を低空飛行した飛行機から、黄色い服を着た人間が飛び降りてくるのが見えた。

（あっ！あの服は！）

ジルは間近で、その黄色い服を見たことがあった。それどころか手でつかんだこともある。そのデザインの服を着ることが許されている人間は、ただ一人だ。

「聖女さまだ！南アルテースの聖女さまだそ！！」

ジルは思わず叫んでいた。

メイベルは、浮遊魔法で座り込む市民たちと白馬に乗った將軍の間にふわりと着地した。

「南アルテース連邦共和国の大統領、聖修道女メイベル・ヴァイスです」

メイベルの凜とした声での名乗りに、市民たちの間から割れんばかりの歓声が上がった。ジルも歓声を上げた一人であった。

將軍は馬から下りてメイベルの前で、片膝を突いて臣下の例を取った。

コスモス宮の中に自身が先導して入ることを将軍は宣言した。

門が開き、将軍が先頭になり中に入り、そのすぐあとにメイベルが続き、歓声を上げる市民たちが続いた。

ジルも興奮で自分が何を叫んでいるのか分からないまま、コスモス宮の中に入った。

兵士たちも使用人たちも無抵抗の構えであった。

コスモス宮の中に入ると、結局西アルテース公国の公王であるビーズマス卿は逃亡していた。

メイベルはバルコニーに出て、外の市民たちにビーズマス卿が逃亡したことを大声で告げた。

メイベルは更に白熱した市民たちの歓声に答えて、手を振った。

しばらく手を振った後に、メイベルは屋内に戻った。

「お腹が空いたわ。慌てて飛行機に乗ったから、飛行機に食べ物を持ち込むの、すっかり忘れちゃったの。何か食べる物ない？」

メイベルは周りを見回して、誰に対してというわけではなく要求した。

部屋には、市民たちも成り行きで入ってきており、その中にはジルもいた。

「あの……聖女さま。これを……」

ジルは持っていた弁当をメイベルに差し出した。

「ウサギ肉の唐揚げね。西アルテースの郷土料理だわ。西アルテースに来たら、一度食べてみたいと思っていたの」

メイベルは弁当箱を開けて、中身を見た。

ジルはメイベルの前で緊張していた。捕虜収容所で自分がメイベルに刃物を突き付けて人質にしたことを、もちろん覚えていた。

「聖女さま。その弁当は私を作りました。ラムースの捕虜収容所で聖女さまに、ご迷惑をおかけした私の作った物など、お口にできないでしょうが……」

「わたしに迷惑？別に気にしなくて、いいわよ」

メイベルは、あっさりと弁当を口にした。

「うん。美味しいわ。ご飯もオカズも、弁当として冷めても美味しいように計算して調理してあるわね。弁当箱には仕切りがあって、ご飯の水気やオカズの汁気が混ざらないようにしてあるのも良いわね」

メイベルの言葉を聞いたジルは、感激のあまり泣き出した。

「ちょっと！？どうしたの？突然泣き出して」

メイベルの疑問をよそに、ジルは部屋にいる將軍と兵士たち、市民たち、使用人たちに振り向いた。

「皆さん。私の話を聞いて下さい」

ジルは捕虜収容所でメイベルに対して自分がした犯罪を、包み隠さず皆に話した。

「そのようなことをした私は、死刑になっても文句は言えなかった。いえ。むしろ、死刑になって当然だったのです。しかし、聖女さまは私を故郷に帰してくれたのです。聖女さまほど心の広いお方を、私は他に知りません！」

ジルの話を聞いた人たちは感動した。もらい泣きをしている人までいる。

「あの……ジルさんだったわね？わたし実は……」

メイベルは、周りの反応にとまどって、何かを訂正するような言葉を話そうとした。しかし、周囲のメイベルを称賛する声にかき消されて誰にも聞こえなかった。

ジルは、さらに続けた。

「しかも、そんな私の作った弁当を聖女さまは、何の疑いもなく召し上がった。普通なら私が毒を入れたのではないかと疑います。それは、私たち西アルテース市民を疑うようなことはしたくないという聖女さまの綺麗な心のあらわれでしょう」

ますます、周囲のメイベルを称賛する声は大きくなった。

「ちょっと！みんな！わたしの話を聞いて！」

メイベルが大声を出した。周囲の人たちは口を閉じて、メイベルに注目した。

「ジルさんだったわね？わたしは、そんなに広い心や綺麗な心は持っていないわ。ジルさんが捕虜収容所で、わたしにしたことを忘れていただけたなの」

メイベルは、あまりにも色々なことがあったので、本当にジルのことは忘れていたのだ。

それを聞いた周囲の人たちからは、また称賛の声が上がった。

「えっ！？何で？わたしが称賛されるの？」

とまどっているメイベルに、ジルが話した。

「分かっております。私のことを忘れたなどとおっしゃるのは、過去のいきさは水に流して、未来の建設に力を尽くせとの聖女さまのお気持ちなのでしょう？」

「だから！本当に忘れていたのよ！」

メイベルは必死になって、忘れていたことを主張するが、周囲からの称賛の声が大きくなるだけだった。

この話は美談として、たちまちサンウーヌス全市に伝わった。

それから十五日後、コスモス宮前の広場では、空位になった西アルテースの君主を選ぶ抽選の神儀式、神儀で選ばれた新公王の戴冠式、

終戦協定の調印式典が行われていた。

式典を見るため集まった市民たちにジルは弁当を販売していた。抗議の座り込みの時は、クリプトン卿が弁当代を出したので、市民が自腹で弁当を買ってくれるのか、ジルは不安だったのだが飛ぶように売れた。

メイベルがジルの弁当を美味しいと評価したことが伝わっており、実際にジルの弁当は美味いため評判が評判を呼んだ。

式典が終わり数日後、サンウーヌス食堂組合の組合長にジルは呼び出された。

（組合長なんて偉い人が、俺に何の用だろう？）

ジルは組合の建物の応接室に通された。そこで組合長が待っていた。

「ジル・エルラブンダくん。君は食堂組合の規則でサンウーヌス市内での弁当販売は、市内の業者に限られていて、君のようにサンウーヌスの外にある店では禁じられているのは知っているかね？」

「はい。知ってます。しかし、私が弁当を販売したのはコスモス宮の周辺です。あそこは市内ではないのでは？」

「まあ。そうとも言えるな」

ジルは気づいていないが、市内の食堂はジルの弁当を脅威に感じていた。このままでは、なし崩しに市内でも販売するようになり、市内の食堂の売り上げが落ちるのでないかと怖れているのである。

しかし、西アルテースの女王となったメイベルが評価しているモノを、あからさまに排除するわけにはいけないので、組合長は封じ込めを考えていた。

「将来のトラブルを避けるために、君と組合は協定を結びたい」

組合長から渡された書類をジルは読んだ。

「駅弁の販売のみを私に認める……駅弁って何ですか？」

「駅で販売される弁当を略して駅弁だ。サンウーヌス駅に本格的な駅舎ができたら、君の弁当は駅弁として駅舎の中だけで販売が許可されるということだ」

ジルは断る理由は無かったので、深く考えずに書類にサインした。

「駅弁」という言葉が誕生した瞬間であった。

第三章 サンウーヌス その2（後書き）

ご感想をお待ちしています。

第四章 メルカトル夫人との出会い

サンウーヌス駅の駅舎が建設され、今まで暫定開業だったサンウーヌス駅が本格開業となった。

西アルテースの女王であるメイベル臨席で開業記念式典が行われた。

そして数日が過ぎ、ジルは毎日駅のホームで駅弁を立ち売りしていた。

ジルがサンウーヌス食堂組合と結んだ協定では、ジルのつくった弁当は、駅弁としてサンウーヌス駅の中で売ることしかできない。しかし、サンウーヌス市内の食堂が、どうなるのかはジルがサインをした協定の書類には一切記載されていなかった。

そのためサンウーヌス市内の食堂は、駅の中で弁当を販売している。

これは明らかに不公平だが、ジルは気にしてはいなかった。彼が自分の駅弁が他の業者の物より美味いことに、自信を持っているとか、そういうことでは無く、不公平な立場に置かれているのを理解していないのだ。

他の業者は駅の中に店舗を出して駅弁を販売しているが、ジルには店舗を出す資金が無いため、駅弁をカートに載せて、ホームで列車の窓越しに販売していた。

三等車の前で列車内に駅弁を渡して、代金を受け取っていると、後ろから声をかけられた。

「駅弁。一つおくれ」

女性に駅弁を渡し、代金を受け取ると、その女性は一等車に乗り込んだ。

（へえ。珍しいな。一等車の客が、俺の駅弁買うなんて）

一等車の乗客は、たいてい列車の食堂車で食事をする。

ジルは知らなかったが、その女性は、南アルテース連邦共和国の四大都市の一つメルキアの有数の大商人メルカトル家のメルカトル夫人であった。

列車が発車すると、メルカトル夫人はサンウーヌス駅の複数の店で買った駅弁を食べ始めた。

「女将さん。この列車には食堂車があるんですから、わざわざ駅で弁当を買う必要は無いでしょう？」

一緒に列車に乗っているメルカトル商会の重役は、メルカトル夫人に話しかけた。

「馬鹿だね。説明しただろ？もう一度話すから良くお聞き！鉄道では乗客は十時間以上乗ることが珍しくない。そうすると、車内でお客様に食事を出さなければ、ならないわけだよ」

「食堂車があるんですから、それで良いんじゃないんですか？」

「あんたは重役で、高給取りだから気づかないんだろうけど、食堂車のメニューは全部一等車の客向きで高いんだ。それに一本の列車

に食堂車は一両だけだから、全部の乗客はさばききれない。食堂車以外でお客さまに食事を提供する方法を、考えなければならんだよ」

重役は、まだ納得できない表情だった。

「駅に売店があつて、そこで食べ物を売っているのですから、それで良いのでは……」

「今のところ、売店で売っている品物は、それぞれの駅の近くの店が品物を提供している。駅ごとに品質は良かったり、悪かったり、バラバラだ」

重役は、ようやく納得した。

「なるほど、分かりました。我が商会のメルカトル鉄道の駅の売店で販売される品物は、商会で全て管理するということですね？ 駅弁も、その一部なのですね？」

メルカトル商会は世界初の私有鉄道、メルカトル鉄道を所有している。

「その通りだよ。サンウーヌスに支店を開くための視察に来たついでに、参考になるかと思って、噂に聞いた駅弁の味見を試してみようかと思ってね」

複数の駅弁をメルカトル夫人は、一口ずつ食べた。どれを食べても夫人は不満顔だった。しかし、最後のひとつとなった駅弁を一口食べたところ、夢中になって全部食べてしまった。

「これは、善は急げだね！」

夫人は列車の通路を歩いていた車掌を捕まえた。

「電報を頼むよ！」

車掌は、夫人の口にした宛名と文面を用紙に書き留め、電報料金を受け取ると、懐中時計で時刻を確認して、持っている列車の運行予定表を確かめた。

（次の駅は、通過だったな。通信袋で電報を頼もう）

車掌は列車内の車掌室に戻ると、通信袋を用意した。

通信袋と言っても特別な物ではなく、片手で持てる大きさの布袋である。通信袋に車掌は、用紙を入れた。

車掌が窓を開けて、前方を見ると通過駅が近づいて来た。駅のホームには通過列車を見送る駅員が一人立っているのが見えた。

列車は、安全のためにスピードを落として、駅のホームを通過する。

「電報だ！頼むよ！」

車掌はホームの駅員の近くに、通信袋を投げた。

駅員は、通信袋を拾い、中の用紙を見ると、駅の電信室に向かった。

その頃、サンウーヌス駅では、駅弁の販売が一段落したジルがホームのベンチに座って休憩していた。

「ジルさん。たぶん。あなた宛ての至急電報が届いている」

顔見知りの駅員が、ジルに近づいた。

「たぶん。俺宛って、どういうこと？」

「宛名が名前じゃなくて、『サンウーヌ駅のホームで駅弁を売っている男』になってるんだ。それに当てはまるのは、ジルさんだけだから受け取ってくれ」

電報を受け取ると、ジルは読み始めた。

「貴殿の駅弁について話をしたい。ついては連絡先を知らされたし。メルキア行き特急列車内メルカトル夫人」

メルカトル夫人は、ジルの駅弁を食べて、それに対してビジネスの話がしたいので、この電報を送ったのだが、ジルは別の意味に取った。

「大変だ！俺の駅弁が不味かったのか？すぐお詫びをしなければ！」

ジルの言葉を聞いて、駅員は思い出した。

「ああ。忘れるところだった。これは返信料前払い電報なんだ。返信料金は向こうが既に払っているから、ジルさんは無料で返信を電報で出せるよ」

「それなら、返信を頼むよ。内容は……」

返信電報の宛名は「メルキア行き特急列車内メルカトル夫人」となっている。

サンウーヌス駅から発信された電文は、メルカトル夫人の乗る列車が停車する駅に先回りした。

その駅で列車が停車すると、車掌は車掌室の窓越しに、ホームの駅員から電報を受け取った。

列車が発車すると、車掌は一等車にある個室の一つに向かった。

「メルカトル夫人。サンウーヌス駅より、返信電報が届いております」

メルカトル夫人は電報を受け取って、読んだ。

「本当に申し訳ない。駅弁代はお返しします。 ジル・エルラブンダ」

メルカトル夫人はジルの返信の意味が分ならず。思わず口にした。

「なんだ？こりゃ？」

車掌は、銅貨数枚をメルカトル夫人に渡した。

「そのジルさまより、電信為替で、この金額がメルカトル夫人宛てに送金されております」

電信為替は、電信を使用して、遠隔地に送金する方法である。

「ちょうど、駅弁一つの値段と同じだね。どうということだろうか？」

駅弁が不味くて抗議の電報を送ってきたとジルが、誤解していると知らないメルカトル夫人は考え込んだ。そして結論を出した。

「そうか！他からも駅弁について契約の話が来ているんだね。契約金の金額も提示しないのでは話をしないという意味だね。確かにこれは、あたしのミスだったね」

メルカトル夫人は、車掌に至急で返信料前払い電報と電信為替を頼んだ。

サンウーヌス駅のホームで、ジルはメルカトル夫人からの電報と電信為替で送られて来たお金を受け取って、驚愕していた。

「金貨十枚……何だ？これは！？」

ジルのような一般人には、金貨一枚でも大金であった。一般人は日常の買い物には銅貨を使い。たまに少し高い買い物をする時に銀貨を使うぐらいである。金貨は商人同士の大規模な取引に使われるくらいで、一般人は手にすることは、ほとんど無い。

メルカトル夫人からの電報には「契約金として金貨十枚送る」と書かれていたが、ジルには意味が分からず混乱した。

「こんな訳の分からないお金は受け取れない！送り返してくれ！」

列車内でメルカトル夫人は、ジルの送り返した金貨十枚と返信電報を受け取った。

「こんなお金は受け取れない……金貨十枚じゃ、契約金としては安かったかね？それじゃあ。金貨二十枚を送ろう！」

金貨二十枚を受け取ったジルは、送り返した。それに対してメルカトル夫人は金貨三十枚を送る。ジルは送り返す。メルカトル夫人は金貨四十枚を送る。ジルは送り返す……というようにジルとメルカトル夫人は、お互いの意志を誤解したまま、電報と電信為替のやり取りを続けた。

メルカトル夫人が、ついに金貨百枚を送ろうとしたところで、車掌が提案してきた。

「お客さま。お相手の方とは、お話が込み入っているご様子ですね。いつそのこと直接電話でお話しなさっては、どうでしょうか？」

「車掌さん。あたしは走っている列車の中にいるんだよ。どうやって電話するんだい？それに相手の自宅に電話があるとは限らないよ」

「予約電話を申し込まれては、いかがでしょうか？」

「予約電話？なんだい、それは？」

南アルテースは、サクラス帝国内では最も通信網が発達した地域であるが、電話は設置代も使用料もまだ高いため自宅に個人で所有している人間は、ほとんどいない。電話があるのは教会や官公庁、鉄道の駅がほとんどである。

予約電話は、電話が自宅に無い者同士が電話で話をしたい時の方法である。

例えば、メルキアにいるAが、サンウーヌスにいるBに電話をした
いとする。お互い自宅に電話は無い。

Aはメルキア駅で予約電話を申し込む。サンウーヌス駅でBが使う
電話の日時（例えば明日の午後一時というように）を指定する。そ
のことはBの自宅に電報で連絡が行き、Bは指定された日時にサン
ウーヌス駅で、Aからの電話を待つことになる。

メルカトル夫人は早くから電話の利便性に気づき、自宅や関連企業
に電話を設置したため、予約電話の存在そのものを知らなかった。

車掌は話を続けていた。

「この列車は次の停車駅で、燃料と水を機関車に補給するため三十
分停車します。お客さまは、その駅の電話でサンウーヌス駅にいる
相手の方と話せるように手配できますが？」

メルカトル夫人は車掌の提案の通りにした。

サンウーヌス駅で、メルカトル夫人からの電話を受けたジルは、こ
のことが自分の駅弁事業が拡大する切っ掛けになるとは、夢にも思
わなかった。

第四章 メルカトル夫人との出会い（後書き）

ご感想をお待ちしています。

第五章 サクラス行き普通列車 その1

ジルとジルの家族は自宅である食堂の厨房で緊張していた。

緊張している理由は、ただ一つだ。

西アルテース公国の女王メイベル・ヴァイスが自分たちと一緒に厨房にいるのだ。

ジルの家族にとっては、自国の女王がいるだけでも緊張するがメイベルが他に持っている数々の肩書きが、さらに緊張させていた。

メイベルはソルティス教会から聖女と認定されており、南アルテース連邦共和国の大統領でもあり、サクラス帝国における貴族序列第一位でもある。

それらだけでもメイベルの社会的地位は分かるが、ジルを最も緊張させているのは、メイベルの袖章だった。

袖章には鍋の絵とタマネギの絵が三個描かれていて、さらに金で縁取りがされている。

鍋の絵は修道女の担当する係が厨房係なことを意味しており、タマネギの数は階級を示している。

階級には五つの位があり、一番上のタマネギ五個はソルティス教会全体で一人だけで、四個も十人しか認められない。そのため、これらはむしろ階級というよりは勲章のような扱いになっている。

事実上タマネギが三個描かれた階級が最高位なのである。

階級とは別に技術の高さが認められれば、袖章に銀の縁取りが入れられる。その中から更に選ばれた者だけが金縁の宮廷専属となる。

つまり、メイベルはソルティス教会における宮廷料理人の事実上の最高位なのだ。

ジルにとっては、メイベルに自分の調理している姿を見られることは、世界的なトップスターの歌手の前で自分が歌を歌わされているような気分であった。

「なるほどね」

メイベルはジルの調理を見ていて、何度もうなづいた。

「あの聖女さま……私ごときの調理を見て、宮廷料理人である聖女さまの参考になるんでしょうか？」

ジルの質問に、メイベルは明るい声で答えた。

「もちろんよ！わたしは宮廷の晩餐会用の料理をすることがほとんどだったの。誰が食べるのかハッキリしていたから、食べる人の好みに合わせることができたわ。ジルさんみたいに不特定多数の人向けに大量に調理したことは無いの、とても参考になるわ！」

ジルとメルカトル夫人は電話で話した結果、ジルの駅弁をつくる技術をメルカトル商会に提供するための契約を結ぶことになった。

問題なのはメルカトル鉄道全ての駅で、駅弁を販売するための大

量生産をどうするかと言うことである。

そのためメルカトル夫人は、メイベルに連絡を取り協力を求めた。

メイベルは個人的な事業として協力することにした。

ジルの調理方法をマニュアル化して調理人を短期間に大量に養成し、一部の調理は自動調理機にすることで大量生産を可能にすることにした。

「あの……聖女さま。私には、これは将来問題になるのではないか
と知っていることがあるのですが……」

ジルは内心想っていることを口に出すことにした。

「マニュアル化して自動調理機を使ったら、手作りの味が失われま
せんか？」

メイベルはうなづいた。

「確かに大量生産すれば、どうしても手作りに比べて味が落ちるわ。
でも手作りでは、食べてもらえるお客さんの数に限りがあるし、値
段も高くなるわ。安く、たくさんのお客さんに食べてもらえるよう
にすることも重要だと思うの」

ジルは納得した。

調理を終えてジルとメイベルが厨房から出ると、ナバルが待ってい
た。

「ジルさん。この書類にサインをして欲しい」

書類は自動調理機がメイベルとジルの共同の発明となるため、発明者の権利として利用料の一部をジルも受け取れることに关するモノだった。

ジルは深く考えることなく、サインをした。

自動調理機は後に食品産業で大量に使用されることになり、ジルに莫大な収入をもたらすことになるのだが、この頃のジルには想像の遥か外だった。

ジルは旅支度をしていた。

「聖女さま。そろそろ、私は出掛けます」

「メルカトル夫人と直接会って細かい打ち合せをするために、サクラス行きの普通列車に乗るんだったわね？ 飛行機は無理だけど、特急列車の一等個室寝台の切符なら、わたしが用意できるのだけど？」

飛行機ならばサンウーヌスからラクスまで一日で移動できる。しかし、飛行機にはパイロットを含めて四人しか乗れず、数機しかないため。一般向けの営業運航は、まだされていない。

飛行機はメイベルのような政府要人の輸送に使われており、運航予定は埋まっているため、メイベルもジルのために飛行機を提供することはできなかった。

「聖女さま。お気遣いはありがたいですが、駅弁は主に普通列車の

三等車の乗客向きです。以前に捕虜収容所から帰ってくる時には鉄道に乗りましたが、冷静に観察する心の余裕はありませんでしたから、この機会に鉄道旅行を経験して、それを駅弁づくりに生かすつもりです」

ジルは家を出る前に、妻のレビーとまだ赤ん坊の娘を抱き締めた。

「あなた……」

レビーが夫のジルを見る表情は、不安そうだった。

以前ジルが遠くに出かけたのは軍に志願して戦場に行った時で、一時は戦死通知が届けられたからである。

妻の不安の原因が分かっているジルは、明るい笑顔をつくった。

「大丈夫だ！今度は戦争に行くんじゃない。仕事で行くんだ。それに時々ここに電話するから、千キロ離れていても俺が元気なのはすぐ分かる。帝都サクラスで土産を買って帰ってくるから、楽しみに待っていてくれ！」

メルカトル夫人からの契約金を使い、ジルは自宅に電話を設置した。新しく従業員も数名雇う余裕ができたため、ジルも短期間家を離れることができるのである。

サンウーヌス駅の切符売場では、ジルに対して駅員が繰り返し質問していた。

「失礼ですが、お客さま。ケオシイ経由サクラス行きではなく、ラクス経由サクラス行きの切符でお間違いないのですね？」

「ああ間違いない。ラクス経由サクラス行きの切符を売ってくれ」

ジルは駅員が何度も確認してくるのに、少しウンザリしながらも納得していた。

（無理もない。ラクス経由で帝都サクラスに行くのは遠回りなものな。こんな切符を買うのは俺ぐらいだろう）

サンウーヌスから鉄道で帝都サクラスに向かうには、三つのルートがある。

一つ目が、サンウーヌスから鉄道で北東にあるケオシィに向かい、そこで大河フルヴィ川を下る船に乗り換える。フルヴィ川を東に向かうと、船は帝都サクラスのふもとにあるポルタワの港に到着する。ポルタワと帝都サクラスの間はケーブルカーで結ばれている。

これは五日ほどかかる。

二つ目は、サンウーヌスから鉄道で東に向かい、サンクワッドで大河アテル川を東に向かう船に乗り換え、サンルミネでラトウース大洋に出て沿岸を航行するポルタワ直通の外洋船に乗り換える。

これは八日ほどかかる。

三つ目は、サンウーヌスから鉄道で東南に向かい、南アルテース地方の東西を結ぶ南アルテース横断鉄道に乗り、南アルテース連邦共和国の仮首都ラクスを経由してサンミルネでポルタワ行きの外洋船に乗り換える。

これには十日はかかる。

船やケーブルカーの切符を別に購入する必要は無く、一枚の切符で帝都サクラスまで行けるようになっていいる。

ジルは一番遠回りで時間もかかり、鉄道料金は距離が長いほど高くなるため一番料金が低い切符を買おうとしている。

それを駅員に何かの間違いではないかと、思われているのである。

ようやくジルは切符を買うことができ、切符を買うための行列から離れた。

ジルの次の番の客の声が聞こえた。

「ぼくも今の人と同じラクス経由サクラス行きの切符をください。間違いではありませんよ」

ジルは思わず声の方を見ると、青い修道服を着た長身の青年がいた。

ジルは知らなかったが、メイベルの世話係のエミリオ・リットンであった。

今までジルがメイベルと会った時には、エミリオはメイベルと同行していなかったので二人は初対面であった。

二人はホームで列車が入線して来るのを待っていた。

「ジルさんは、そういう理由でラクス経由サクラス行きの切符を買ったのですか？」

ジルとエミリオはお互いに、変わった切符を買ったため興味を持って会話をしていた。

ジルとエミリオがこれから乗るのは、機関車を除いて十三両編成の普通列車だ。

八両はラクス止まりであるが、五両はメルカトル鉄道のラクスーサンミルネ間の特急列車に連結される。

その特急列車にメルカトル夫人が乗って、サクラスに行く予定があるため、ジルはそれに合わせて列車内でメルカトル夫人に会うことにしたのである。

「しかしエミリオさん。ややっこしい車両の使い方をしますね。わざわざ五両をラクスで切り離して、また繋げるような複雑なことをしなくても、そのまま走らせれば良いじゃないですか？」

「それには理由があるんですよ」

エミリオはジルに説明した。

メルカトル鉄道では増大する乗客に客車の不足が起きている。そのため南アルテース鉄道から客車を借りているのである。

メルカトル鉄道で列車の本数を増やすためには、列車を牽引する機関車も増やさなければならぬのだが、南アルテース鉄道の機関車を借りることはできない。

なぜなら、メルカトル鉄道で運用しているのは珪油エンジン機関車

で、南アルテース鉄道では蒸気機関車だからである。

蒸気機関車を運用するためには、水を補給するための給水設備と向きを変えるためのターンテーブルが必要だか、最初から珪油エンジン機関車を導入したメルカトル鉄道にはそれらの設備は無い。

そのため列車の本数を増やせないの、一本の列車の車両数を増やすことで乗客の増加に対応している。

ジルとエミリオが乗る車両もラクスから先は、メルカトル鉄道に貸し出されることになっている。

「なるほど、そういうことだったんですか。ところでエミリオさんは、何故ラクス経由でサクラスに？」

「これですよ」

エミリオは自分の荷物から写真機を取り出した。

「これで鉄道を写真に撮るんです」

エミリオは、鉄道写真を撮影することを趣味とする鉄道マニアであった。

第五章 サクラス行き普通列車 その1（後書き）

ご感想をお待ちしています。

サンウーヌからサクラスまでの所要日数は、原作からの私なりの推測です。

第六章 サクラス行き普通列車 その2

駅のホームには小包と新聞紙の束が大量に積み上げられていた。

ジルとエミリオの乗る列車には荷物車が一両連結されており、それに積み込まれるのである。

「何で？新聞があんなにたくさん積まれているんだ？」

ジルが独り言に、エミリオが反応した。

「それには理由があるのですよ」

エミリオは解説を始めた。

まず。サクラス帝国における新聞の歴史の初めから、説明し始めた。

（何も、そこから始めなくても……）

ジルは思ったが、エミリオは親切に教えてくれているようなので止めなかった。

それにジルはメイベルに会った時の経験で、メイベルのような解説好きの人間は、途中で止めると欲求不満になると知っていた。

一世紀半まえに東大陸が統一されて、サクラス王国連合帝国が成立した。

その頃、帝国全土にあるソルティス教の教会が教会に来る信徒向け

に始められた「壁新聞」が、サクラス帝国における新聞の歴史の始まりとされている。

教会の壁に貼られた一枚の紙に、一般的なニュースが書かれただけの物ではあるが、当時は壁新聞の前に人だからができるほどの大人気であった。

なぜなら、それまで一般人が遠い所で起きたニュースを知ろうとすれば、国や教会からの一般への通達を除けば、不確かな噂話を聞くしかなかったからである。

その内に、「家に持って帰って、ゆっくり読みたい」と言う人も出て来て、教会は大量に印刷して売るようになった。

「新聞が商売になる！」と分かった民間業者も新聞業に参入するようになった。

しかし、民間の新聞社が発行した新聞は、当初全く売れなかった。

なぜなら、サクラス帝国全土に組織があるソルティス教会の発行する新聞は、その組織力を使って収集するためニュースは量も豊富で、内容も正確であり、速報性も勝っていた。

帝国が統一された最初の時期には、全国規模の組織を民間業者が持つことは資金的に不可能であった。

民間の発行する新聞は、どうしても教会の発行する新聞にニュースの内容で負けてしまうのである。

そのため倒産の危機に立たされた民間の新聞各社は、販売部数を増

やすために一計を案じた。

教会が発行する新聞は事実を正確に伝えるために、文章は堅い表現になっている。悪く言えば無味乾燥であった。

写真はまだ発明されておらず。カラーイラストの印刷は当時は不可能だったが、白黒のイラストを印刷するのは可能であったのだが、「イラストを入れては紙面に入る字数が少なくなる」という教会内部の意見が強かったため、悪く言えば教会新聞は単なる文章の羅列だったのである。

そこに注目したのが、民間の新聞各社であった。

「娯楽」を重視した紙面づくりをすることにしたのである。

見出しの活字を大きくして、読者の注目を集めるようにしたり、現実に起きた事件を風刺したイラストを載せるなどした。

正確なニュースだけではなく「娯楽」として新聞を読む読者を引き付け、部数の増加に成功した。

その時、最も過激な方法を取り部数を延ばしたのが「ソロリエンス新聞」であった。

ソロリエンス新聞社は「他人の不幸は最大のエンターテイメント」が信条の新聞社である。

事件を大袈裟に扱い、事件がなければでっち上げてでも記事を作る。

過去に起こったサンクワッド事変の時にはソロリエンス新聞は、西

アルテースのサンクウッドでの有りもしない独立運動をでっち上げ、更に帝国が住民から搾取しているなどと事実無根の記事を書いた。

新聞記事を鵜呑みにした偽善貴族や成り金たちが、サンクウッドに大量の武器弾薬を提供した。

ソロリエンス新聞は、それを指して武装蜂起間近などと報じたために帝国も軍を出すハメになった。

帝国もサンクウッド市民も戦いたくないのに、開戦寸前に追い込まれて行った。

「エミリオさん。そのことは有名ですよ。英雄クリプトン卿の活躍で戦争は未然に回避されたのですよね？」

ジルとエミリオの二人は、ホームに立ったまま会話していた。

まだ、二人の乗る列車はホームに入って来ていない。

「ええ、そうです。帝国は報道の自由を認めています、当時も今も『報道を規制すべき』という意見が、時折帝国議会で提案されます」

「でも、ソロリエンス新聞は今も発行されていますよね？」

「『報道を自由にする』ことの弊害と『報道を規制する』ことの弊害を比べた場合に、後者の方が大きいと考えられているからです。ソロリエンス新聞の記事を鵜呑みにする人は、今ではほとんどいませんが、ゴシップ記事は面白いですからね。ソロリエンス新聞は帝国タイムス・インペリアル新聞と並ぶ帝国三大紙の一つであるわけ

ですよ」

「私も正確な情報を知りたい時は、帝国タイムスカインペリアル新聞を買います。ソロリエンス新聞もゴシップ記事目当てにたまに買いますね」

「帝国タイムスとインペリアル新聞は、もともと教会の発行している新聞でしたからね。『報道機関を教会が独占するのは良くない。』ということ、民営化された新聞社ですから、記事の正確なところは教会新聞の方針を継承しています」

ジルはホームに積み上げられている大量の新聞の束を、再び見た。

「ところで、あんなにたくさん新聞が列車に積み込まれる理由は何ですか？」

エミリオは説明を続けた。

初期の新聞は全て帝都サクラスで製作され、印刷されて、新聞は帝国各地へ輸送されていた。

当時の輸送手段は馬車か運河だったため、帝都から遠く離れた町や村では一月以上前の日付の新聞を受け取るのが当たり前であった。

電信網が帝国に張り巡らされると、帝都サクラスにある新聞社の本社から地方にある支社に電信で新聞の内部が送られ、支社で新聞が印刷されるため、支社のある地方都市では帝都サクラスと同日に同じ内容の新聞を受け取ることが可能になった。

しかし、支社の無い町や村では数日遅れの新聞を受け取ることにな

った。

例えば西アルテース公国の場合、首都サンウーヌス西ある新聞社の支店が帝都サクラスにある本店から電信で新聞の内容を受け取り、新聞を印刷する。

そして新聞を西アルテース公国内の他の町や村に輸送するのである。かつては馬車や運河を使っていたので、数日遅れになった。

「でも、鉄道が開通して以前では数日かかっていた所まで数時間で行けるようになりましたし、駅からは貨物自動車に積み換えますから、公国内のほとんどの町や村で同じ日付の新聞を受け取ることができるようになりました」

「全て聖女さまのおかげ、と言うわけですね」

ジルは感心して言った。

「その通りです。あのような素晴らしい御方の側で働けることは、ぼくにとって名誉であり、嬉しいことです」

「聖女さまのお側で？」

ジルが疑問を顔に出した。

「申し遅れました。ぼくは聖女さまの世話係をしています」

そこに蒸気機関車に牽引された客車列車がホームに入って来た。

列車が停車すると、機関車のすぐ後ろに連結されている荷物車に荷物係たちにより、小包と新聞紙が積み込まれた。

エミリオは、積み込み作業の様子を写真機で撮影した。

ジルとエミリオは、三等車に乗り込んだ。

「クッション。いかがですかー。毛布。いかがですかー」

三等車の窓の外のホームを、クッションと毛布を積んだカートを押した販売員が歩いていった。

三等車の座席は、木製の椅子でクッションも無い。

長時間、木製の椅子にじかに座っていると、腰が痛くなる。

列車旅行に慣れた人は、クッションを持参してくるが、それを知らない人向けにクッションを販売している。

夜は、一等寝台車ならば寝台がセットされるため、乗客はベッドに横になって寝ることができるが、三等車は普通の座席があるだけのため、乗客は椅子に座ったまま眠るしかない。そのための毛布を販売している。

ジルは捕虜収容所から、列車に乗った経験があるため、クッションと毛布を持参していた。

「なるほど。三等車に乗る時は、クッションと毛布が必要なんです。ね。今まで列車に乗った時は、聖女さまのお召し列車に同乗していたので、それは知りませんでした」

エミリオは販売員を撮影しながら感心していた。

「エミリオさん。クッションや毛布を持ってきたくないのならば、買ったほうが良いですよ。クッション無しでは腰が辛くなりますし、毛布無しでは夜眠れませんよ」

「それが……その……」

エミリオは言葉を濁した。

「どうかしたんですか？」

「恥ずかしながら、お金が無いんです。この写真機を買うのに貯金を全部使ってしまったので……帝都サクラスまでの往復の鉄道の切符代と食事代で持っているお金はギリギリなんです」

写真機は、まだ一般には普及しておらず。高価であった。

ジルは疑問の表情になった。

「エミリオさん。それなら、あなたは何をしに帝都に行くんですか？帝都に行っても、お金が無いんじゃ、帝都見物もできないから、すぐに帰って来るしかないでしょう？」

エミリオは何かを自慢するように胸を張って答えた。

「もちろん。鉄道に乗ることと、鉄道を写真に撮ること自体が目的です！」

「鉄道に乗ること自体が目的……ねえ」

ジルにはエミリオの言葉が理解できなかった。

と言うより、サクラス帝国のほとんどの人間が理解できないだろう。

ほとんどの人間にとって「鉄道」は「目的地までの移動手段」である。

「鉄道に乗ること」自体を目的にするなど、ほとんどの人間にとって理解の外であった。

「鉄道マニア」が社会でよく知られるようになるのは、少し先のことである。

午後九時、定刻通りにジルとエミリオが乗る普通列車は、サンウーヌス駅を発車した。

第六章 サクラス行き普通列車 その2（後書き）

ご感想をお待ちしています。

第七章 サクラス行き普通列車 その3

走る列車の車内で、ジルとエミリオは朝を迎えていた。

ジルとエミリオは向かい合わせに座席に座っていた。

エミリオは軍用パンを朝食として食べていた。

ジルは妻のレビーがつくったミートパイとフルーツパイの愛妻弁当を、朝食として食べながら思った。

（エミリオさん。軍用パンなんか食べているとは、本当に金が無いんだな）

軍用パンはサクラス帝国に加盟している国家の軍隊ほとんどが、保有している保存食品である。

毎日、町のパン屋で焼かれているふつくらと軟らかいパンとは違い、長期間保存できるように堅く焼いてある。

石のように堅いため、なかなか噛めない。

ジルが西アルテース軍に所属していた時に、行軍中の食事はほとんど軍用パンであった。

（毎回、食事の時間の度に、軍用パンの不味さを仲間の兵士たちと言いつけていたものだった）

南アルテースの捕虜収容所で、暴動や脱走などがほとんど起きなか

った理由の一つが、食糧事情が捕虜になってからの方が良かったことである。

たまに軍は、消費期限切れ間近の軍用パンを一般にタダ同然の値段で放出する。

エミリオが食べているのは、それなのだ。

ジルは自分の弁当をエミリオに分けようかとも思ったが、聖女メイベルの世話係にそれをするのは失礼のように感じられたし、エミリオ自身の表情が不味いパンを食べているとは思えないほど輝いていた。

エミリオは左手にパンを持って噛みながら、膝の上に開いた厚い本を置いて、本の上には懐中時計とメモ用紙を置いて、右手でメモ用紙になにかをメモしていた。

「エミリオさん。その膝の上の厚い本は、何ですか？」

ジルは別に本に興味があったわけではなく、自分の方がまともな食事をしている、無言のままエミリオと向き合っているのが精神的に苦痛になってきたので、何でも良いから話の種を見つけようとしただけであつた。

エミリオは自慢するように、その本の表紙をジルに見せた。

表紙には「鉄道時刻表」と書かれていた。

「鉄道時刻表……何ですか？それは？」

ジルが表紙に書かれていた文字をそのまま口にして、エミリオに質問した。

「知らないんですか？ ジルさんともあろう人が！？」

エミリオは激しく驚いた。

「は……はい……、知りません。私が知らないとおかしいですか？」

「なんて事だ！ 鉄道の歴史に名を残すであろうジルさんが、時刻表のことを知らないなんて！」

エミリオは両手で頭を抱えた。

「何故？ 私が鉄道の歴史に名を残すんですか？」

「ジルさん！ あなたは自分の重要性に気づいていない！」

エミリオは右手の人差し指を、ジルの顔に向けて突き付けた。

「ジルさん！ あなたは『駅弁』を初めて販売した人として、間違いなく鉄道の歴史に記録される人なんですよ！」

ジルはエミリオをなるべく刺激しないように、穏やかな口調で反論した。

「でも、駅で弁当を売っている人なら、私以外にもいるじゃないですか？」

「分かってないですね！ジルさん！『駅弁』という商品名で初めて駅で、弁当を販売したのは、ジルさんだけなんですよ。必ず未来の歴史書にはジルさんの名前が、そのことで載ります！」

（そんな、大げさな）

ジルは思ったが、口にとましますエミリオが興奮しそうなので、話題を戻すことにした。

未来においてはエミリオの予想通りに、ジルは鉄道の歴史書に「初めて駅弁を販売した人」と書かれることになるのだが、ジルにとっては予想できないことであった。

「話を戻しますが、鉄道時刻表とは何ですか？」

「ジルさんはサンウーヌス駅のホームで、列車の到着・発車時刻に合わせて駅弁売ってるんでしょう？どうやって到着・発車時刻を調べていたんですか？」

「駅にある案内板を見ました」

「ああ。それもありましたね」

エミリオは鉄道時刻表についての詳しい説明を始めた。

鉄道時刻表は一般書店や駅の売店で販売されている。

鉄道の運転時刻を表にまとめた物を、冊子にしたものである。

鉄道時刻表とはなっているが、乗り合い馬車や船の運転時刻も掲載

されている。

ページの最初にはサクラス帝国全土の路線図が掲載されており、路線の横にある数字のページを読めば、その路線の運転時刻が分かるようになっている。

「はあ。なるほど。便利な物ですね。ところでジルさんは、その時刻表で何を調べていたんですか？」

エミリオは「よくぞ聞いてくれました」という表情になり、時刻表の路線図をジルに向けて開いた。

「今、ぼくたちが乗っているこの列車は、このあたりを走っています」

エミリオは路線図の鉄道路線を表す太い線を指差した。

「そして鉄道の横には、これが走っています」

今度は、鉄道路線と平行するように引かれている細い線を指差した。

「エミリオさん。この細い線は何ですか？」

「乗り合い馬車の路線です」

鉄道が開通する以前のサクラス帝国における遠距離の交通手段は、乗り合い馬車か運河を航行する船であった。

新しく開通した鉄道と平行する馬車・運河船は、ともに速度では、鉄道にかなわず。利用客は激減している。

運河船の場合は、高速で運ぶ必要のない大量の貨物輸送で、鉄道より運賃が安い利点があるため貨物輸送専用となってこれからも利用される予定でいる。

しかし、乗り合い馬車はまったく商売にならなくなったため廃止が決められた。

「そして、この乗り合い馬車の路線が廃止第一号になり、今日は最後の馬車が走る日なんです。時刻表によると、次の駅でこの列車と馬車の最終便が同時発車になります」

「鉄道と馬車の駅が同じ場所にあるとは偶然ですね」

「偶然ではなくて、もともと乗り合い馬車の駅があった所に鉄道の駅を造ったんですよ」

しばらく後、ジルたちの乗る列車は、次の駅のホームに停車していた。

小さな駅で、駅舎も小さいため、列車の窓から駅前広場を見渡すことができた。

その駅前の広場には、一台の乗り合い馬車が停車していた。

四十人ぐらい乗れそうな馬車だったが、乗客は一人もおらず。馭者と車掌の二人だけだった。

この駅からの乗客は全員列車に乗り込んだ。

馬車から車掌が大きな声を張り上げていた。

「本日までの乗り合い馬車のご利用、ありがとうございました！これが最終便になります！」

車掌は乗客は一人もいなかったが、駅前にいる人々に向けて頭を下げた。

まばらではあるが、人々の間から拍手がおきた。

その様子をエミリオは列車内から写真機で撮影していた。

発車時刻となった。

列車の窓から馬車を見ていたジルは視線に気づいた。

馬車の馭者と車掌が勝負を挑むような目で、自分の方を見ているのだ。

そのような目で見られる覚えのないジルは戸惑った。

「ああ。またですか」

エミリオがつぶやいた言葉にジルは反応した。

「『また』とは何がですか？」

「鉄道が開通する前は、馬車が陸上で最速の乗り物でしからね。鉄道に負けることが納得できずに、スピード勝負を挑もうとする馬車

は多いんですよ」

ジルは馭者と車掌の視線が自分に向けられたものではなく、列車に向けられたものであることが分かった。

列車を牽引する蒸気機関車が汽笛を鳴らして、動き出した。

同時に馬車も出発した。

蒸気機関車の加速はゆっくりとしたもののため、最初の数秒間は馬車が先行した。

しかし、すぐに蒸気機関車が追い抜き、たちまちの内に馬車を後方に置き去りにした。

ジルの目には、馬車の馭者と車掌が悔し涙を流しているのが見えた。

「あの人たち、どうなってしまっているのかね。エミリオさん」

「どうなってしまおうとは、誰がですか？」

ジルの質問の意味が分からなかったエミリオは、聞き返した。

「あの馬車の馭者さんと車掌さんですよ。乗り合い馬車が廃止ならば失業してしまうのでは？」

「失業の心配はありませんよ」

エミリオは明るい声で答えた。

「確かに鉄道と平行する乗り合い馬車は廃止されますが、鉄道の駅から鉄道の通っていない町や村まで、人や荷物を運ぶ馬車は鉄道が開通したことで増加しているんです。あの人たちも、そちらで働けば良いだけです」

「それは良かった。しかし、こう急激に世の中が変わってしまうと、自分を取り残されないか、心配だな」

「なに言ってるんですか、ジルさん」

エミリオは笑った。

「世の中が変わったことで、ジルさんは得をしている一人じゃないですか、鉄道が開通しなければ『駅弁』をジルさんが製造販売することも、なかったでしょう？」

「そう言えば、そうでしたね」

エミリオの予想に反して乗り合い馬車は、数年後急激に姿を消すことになる。

自動車的大量に生産されて社会に普及したため、乗り合い自動車に取って代わられたのだ。

馭者のほとんどは、運転手になったため失業問題は発生しなかった。

「消え行く乗り合い馬車」というのがマスコミで報道されたため、廃止される乗り合い馬車に乗車したり、写真撮影したりするのがブームとなった。

最後の通常営業の乗り合い馬車路線が廃止されると、乗り合い馬車の保存運動が盛んになった。

保存された乗り合い馬車は、イベントとして年に数回満員の乗客を乗せて走ることになる。

そのような未来を知るはずもなく、ジルとエミリオの乗る列車は、走り続けていた。

第七章 サクラス行き普通列車 その3 (後書き)

ご感想をお待ちしております。

第八章 サクラス行き普通列車 その4

ジルとエミリオの乗る列車は、南アルテース連邦共和国の仮首都ラクスに到着した。

列車内で二人は三泊四日を過ごした。

ジルは、いささかうんざりとしていた。

エミリオは、その間ずっと自分の持っている鉄道についての知識を、ジルにしゃべり続けたのであった。

ジルにとって鉄道は「便利な乗り物」という認識しかないので、エミリオが夢中になっているのが正直理解できなかった。

（しかし、ここで俺はメルカトル夫人と合流するため一等車に移る。三等車のエミリオさんとは、ようやくお別れだ）

メルカトル商会の本店はメルキアであるが、商用のためメルカトル夫人はラクスに来ていて、これからサクラスに向かう。

ラクスから先は、メルカトル夫人がジルのために一等車の個室を用意しているので、ジルはそちらに乗ることになっている。

ジルとエミリオは駅のホームに降りていた。

ジルたちが乗ってきた蒸気機関車が牽引してきた列車は、荷物車一両と三等車五両と切り離して、ホームに残して行った。

そこに後ろの方から珪油エンジン機関車が、電源車一両、二等車四両、食堂車一両、一等車一両、展望車一両を押してきて連結した。

新たな車両を押してきた珪油エンジン機関車は、列車の先頭に連結され、この列車を牽引することになっている。

ラクスから先は、メルカトル鉄道が運行する「特急列車」になる。

エミリオはホームから、列車の切り離し、連結作業を夢中になってカメラで撮影していた。

エミリオの撮影が一段落したところを見計らって、ジルは声をかけた。

「エミリオさん。ここでお別れですね。名残惜しいですよ。鉄道のお話もっと聞きたかったです」

もちろん社交辞令である。

エミリオはジルの内心に気づくことなく、名残惜しそうな表情になった。

「全くです。鉄道のお話がこんなにたくさんできて楽しかったです。普段周りに鉄道の話をできる人がいないので……」

「えっ！？でも、聖女さまとかがいるじゃないですか？」

ジルの質問にエミリオが答えた。

「聖女さまは、あくまで大量輸送するためのシステムとして鉄道を

見ているので、個々の車両の詳細にはあまり興味が無いんです。勇者さまも乗り物を操縦することは好きですが、レールの上しか走れない機関車よりも、自由に動ける自動車や飛行機を操縦する方が好きみたいです。聖女さまの給仕係のパセラさんは機械関連については説明しても全く理解できないみたいですし……」

ジルはエミリオの鉄道についての話を理解していたわけではなく、適当に話を合わせていただけなのだが、もちろん。そのことは口にできなかった。

「おや。ジルさんだね？電話では何度か話したが、直接会うのはこれが初めてだね」

ジルが後ろから声をかけられたので振り向くと、そこにメルカトル夫人がいた。

郵便でお互いの写真を送ってあったので、お互い顔は知っていた。

ジルとメルカトル夫人はお互いに挨拶を済ませると、一等車に乗り込もうとした。

「やあ！アダモくん」

エミリオの声が聞こえた。

「エミリオさん。約束の物持ってきてくれましたか？」

エミリオの声に反応したのは、メルカトル夫人の側にいた十歳ぐらいの男の子だった。

ジルは初対面のため知らなかったが、メルカトル夫人の息子のアダモであった。

エミリオは写真の束を取り出して、アダモに渡した。

写真には、蒸気機関車が写っていた。

アダモは、その写真を笑顔で受け取ると、自分も写真の束を取り出してエミリオに渡した。

その写真には、珪油エンジン機関車が写っていた。

ジルはメルカトル夫人から、アダモが自分の息子であることを紹介された。

（エミリオさんがラクス駅で、自分以外の鉄道マニアと会う予定があると言っていたのは、メルカトル夫人の息子さんのことだったのか）

そうジルが思っていると、メルカトル夫人がエミリオに声をかけた。

「エミリオさん。いつもアダモに蒸気機関車の写真を送ってもらってすまないね」

「いいえ。メルカトル夫人。ぼくもアダモくんからお返しに珪油エンジン機関車の写真を送ってもらっていますから」

エミリオとメルカトル夫人の会話によると、エミリオとアダモはお互いに鉄道マニアであることを知って以来、鉄道についての文通仲間になっているとのことだった。

エミリオが三等車に向かおうとすると、メルカトル夫人が声をかけた。

「おや？ 一等車に乗らないのかい？」

「恥ずかしながら、一等車に乗る財布の余裕が無いので……」

「それなら、あたしが一等車に招待するよ！」

「いえ。そういうわけには……」

「遠慮しなくて良いよ。ちょうど、本来乗るはずだったウチの従業員が都合悪くなって、席が一つ余っているんだ！」

「それでは……お言葉に、甘えさせてもらいます」

エミリオも一等車に乗ることになった。

列車は定刻通りにラクス駅を出発した。

この列車の乗車料金は、ラクスから先は少し複雑になっている。

ラクスまでの鉄道は、南アルテース連邦共和国の国有鉄道である。

ラクスから先は、メルカトル商会の私有鉄道である。

そのため乗客はラクスを跨いだ乗車券を買う場合に、少し複雑になる。

例えばエミリオの初めの予定のように、南アルテース国有鉄道からメルカトル鉄道に貸し出される三等車に乗ったままで、この特急列車に連結されてサクラスまで行った場合は、乗車券の他に特急券を買う必要は無い。

この場合「サンウーヌス発サクラス行きの普通列車」に乗ったという扱いになるからである。

しかし、ラクスからこの特急列車の三等車に乗ってサクラスに行った場合、乗車券の他に特急券を買う必要がある。

「ラクス発サクラス行きの特急列車」に乗った扱いになるからである。

以上のようなことをエミリオはジルに説明した。

「それは、ややっこしいですね。お客さんにとって不便じゃ、ないんですか？」

エミリオはジルにうなづいた。

「確かに、この鉄道料金は複雑で評判が悪いです。改善しようと、南アルテース鉄道とメルカトル鉄道が協議しているんですが、別組織なのでなかなか話がまとまらないでいます」

今の時点ではエミリオが知るはずもない未来であるが、西大陸のフオレスト・ドラゴンの奇襲により世界大戦が始まった時に、生産力増強のためにサクラス帝国全土に鉄道網が敷設された。

その際、鉄道料金の体系も単純化した方が便利のため、改善されることになる。

ジルはエミリオの鉄道趣味にまた付き合わなくてはならないかと思ったが、エミリオはアダモとの鉄道についての会話に夢中になったし、ジル自身はメルカトル夫人との駅弁についての打ち合わせに入った。

ジルたちが今いるのは、列車の最後尾の展望車の中だ。

展望車の中は、サロンになっており、テーブルとソファが並べられている。

ジルとメルカトル夫人はテーブルを挟んで、座り、テーブルの上には様々な書類を置いて駅弁についての打ち合わせをした。

ジルとアダモは展望車のデッキに出て、すれ違う列車を撮影している。

メルカトル夫人は、打ち合わせを始めて、しばらくしてから、済まなそうな表情になった。

「ジルさん。少し失礼な事を言うけど……」

「なんですか？」

「少し汗臭いよ」

ジルは慌てて自分の匂いを嗅いだ。確かに汗臭かった。

ラクスに来るまでに列車ので、ジルは三泊四日を過ごした。

列車内には入浴するための設備など無く、ジルだけでは無く乗客は体を洗うことはできなかった。

「すみません。こんな汗臭い体で、お会いするなんて……」

ジルが頭を下げると、メルカトル夫人は豪快に笑った。

「汗臭いことに文句を言っているわけじゃないよ。あたしも今じゃお上品に一等車に乗っているが、鉄道ができる前は、荷馬車数台を連ねた隊商で各地を転々と渡り歩いて売り回っていたんだ。その頃は何日も風呂に入れないこともあった。ここで風呂に入って行かないか？という話だよ」

「えっ！？列車の中に風呂があるんですか？」

メルカトル夫人は、自慢するような口調になった。

「ああ。列車の中で入浴ができるのが、我がメルカトル鉄道の自慢の一つさ」

少し後、ジルは列車内でお湯の張られた浴槽に入っていた。

浴槽は一人が入れば一杯の大きさではあるが、大人が手足を伸ばすことができる。

四日ぶりの風呂に、ジルは気持ち良く漬かっていた。

（列車の中で風呂に入れるとは、思わなかったな）

ここは一等車の個室に付属している浴室である。

入れるのは、もちろん一等車の乗客だけだが、入浴設備のある列車は、今のところメルカトル鉄道のみである。

ジルが浴槽に漬かって、のんびりしていると、突然浴室のドアが激しくノックされた。

「ジルさん！ジルさん！」

エミリオの声だった。

「何ですか？エミリオさん」

「速く！風呂から出てください！」

エミリオは慌てた口調だった。

何か緊急事態が起きたと思い、ジルは腰にタオルを巻いて浴室から飛び出した。

部屋にはエミリオだけでなく、アダモもいた。

「ジルさん。停車時間は五分だけですよ。窓の外を見てください！」
ジルが訳が分からないまま外を見ると、列車が駅に停車しているところだった。

窓から見える隣の線路には、珪油エンジン機関車が一両停車していた。

エミリオとアダモは、その機関車を撮影した。

「あの……エミリオさん。あの機関車がどうかしたのですか？」

「新型の珪油エンジン機関車ですよ」

「今までのと、どう違うのですか？」

「一目見れば、分かるでしょう？」

ジルはラクス駅で見た珪油エンジン機関車の形を思い浮べた。

四角い箱のような形をしていた。

それに対して窓の外に見える機関車は、凸型をしている。

そのことをジルが口にする、エミリオとアダモが凸型機関車が製造された理由について説明を始めた。

箱型機関車は車体の中央に大きなエンジンを積んで、車体の両端に運転席がある。

運転士は反対方向に機関車を動かす場合は、機関車から外に出て、反対側の運転席に行かなければならない。

それに対して凸型機関車は、車体の両端にエンジンが積まれていて、中央に運転席が一つある。

中央の運転席から前後両方が見渡せるため、反対方向に機関車をすぐ動かせるようになった。

客車や貨車の入れ換え作業に便利なのである。

説明を聞き終わったジルは（俺はあんたらみたいな鉄道マニアではない！人が風呂に入っている時に、そんなつまらない事で、呼ぶな！）と怒鳴りたかったが、聖女メイベルの世話係のエミリオとメルカトル夫人の息子のアダモに、そんな事はきないので、ジルとしては皮肉な口調で、こう言うのが精一杯であった。

「そんなに鉄道趣味が大好きなら、鉄道専門誌でも出版なさったら、どうです？」

この言葉をエミリオとアダモは真に受けて、鉄道専門誌を出版するための活動することになる。

（鉄道を趣味にするなんて、変わった事をしている人間なんて少ないだろうから、鉄道専門誌なんて売れるはずがない！）

というようにジルは思ったが、後に出版された鉄道専門誌は大ヒット

トとはいかながったが、サクラス帝国全土に徐々に生まれようとしていた鉄道マニアたちにとっての聖典となるのであった。

第八章 サクラス行き普通列車 その4（後書き）

感想・評価をお待ちしております。

第九章 サクラス行き普通列車 その5

ジルたちの乗る列車は、イストム地峡に差し掛かろうとしていた。

イストム地峡とは、長さが三千キロを超える大きなリダス半島の付け根にある陸地のくびれた場所である。

リダス半島に隔てられたサナーレ南洋側の地域とラトゥース大洋側の地域を行き来するには、イストム地峡にある険しい山脈を越えなくてはならない。

かつては山脈を越えるのには馬車で十日はかかっていたが、現在では数時間で列車は走り抜けてしまう。

山脈の手前の駅で、列車は停車していた。

列車の最後尾の展望車に向けて、機関車が近づいて来た。

それを展望車の車内から、ジルは見ていた。

「事前に何も知識が無ければ、機関車が衝突する！と思ったでしよ
うね」

展望車に近づいた機関車は作業員によって連結された。

これから列車は急な坂の続く勾配区間に入るため、先頭で列車を引く機関車では馬力が足りないのです、後ろから押すためのもう一両機関車を連結するのだ。

ジルの手にある紙の束には、そのことの詳しい解説が書かれていた。エミリオがジルが鉄道専門誌を出発することを提案したため、早速車内で下書きを書いたのである。

エミリオからジルに読んで感想を言ってくれるように頼まれたので、仕方なしに読んだのであった。

ジルは音読して再び読んだ。

「アルテース西南戦争において、鉄道の建設は突貫工事で進められた。敵を一気に制圧するためには、鉄道で大量の兵力と物資を送り込むことが必要だと考えられたからである。メルカトル鉄道のイストムの山脈越えも、かなりの突貫工事であり……」

「ちょっと。待ってください！ ジルさん！」

エミリオがジルの音読を止めた。

「何ですか？ エミリオさん？」

「何故？ 声を出して読むのですか？」

ジルは「何を当たり前のことを聞くのだ？」という表情になった。

「本を読む時に声を出して読むのが、当たり前でしよう？」

それに対してエミリオは「この人は何を言っているのだ？」という表情になった。

「本を読む時には、黙読が当たり前でしょう？ ぼくは学校でそう習いましたよ」

ジルは反論した。

「私は学校では、本を読む時には声を出して読むものだど、習いましたよ」

ジルとエミリオは、お互いの学校で習ったことが正反対なので不思議に思った。

もし、この場にメイベルがいれば、その理由について詳しい説明ができただろう。

昔は本は高価な物であり、文字を読むことができる人間も限られていた。

そのため一冊の本を一人で読んだ場合、その本からの知識を得るのは、読んだ一人だけになるのが問題視されていた。

学校においても生徒全員に一人一冊ずつ、同じ教科書を配るのは高価なため不可能であった。

当時の学校の教室における一般的な教育方法は、一冊しかない貴重な本を文字が読める一人（ほんんどの場合教師）が声を出して読むことで本に載っている知識を大勢の生徒たちに伝えたのであった。

教育を受けて文字を読めるようになった人が故郷の村に帰ると、村の集会所で他の文字を読めない村人たちのために本を読み聞かせた。

そのため読書をする時は声を出して読む「音読」をするものだというのが、一般的な認識だったのである。

時代が進み本の大量生産が可能になり本が安い物になると、誰でも手軽に本が入手できるようになった。

図書館において、その影響による変化があった。

現在では図書館は「誰でも自由に利用できるもの」であるが、かつてはそうでは無かった。

図書館の蔵書は全て高価で貴重な物だったため、図書館を利用できるのは学者とその助手など許可を得た一部の者だけであった。

図書館の利用が一般にも開放されると、図書館の閲覧室で行われていた読書をする時の習慣が一般に広まった。

閲覧室で本を読む時に声を出して読むと、他の利用者に迷惑が掛かるため、声を出さずに読む「黙読」が常識であった。

一般人にも「黙読」の習慣が広まったのであった。

教育界では「音読」と「黙読」どちらを読書をする時の習慣として、学校で教えるべきか議論が行われた。

音読賛成派は「声に出して読んでこそ、本の内容が頭に入る」と主張し、黙読賛成派は「声を出さずに頭の中で文章を読んでこそ、本の内容が頭に入る」と主張している。

いまだに議論に結論は出ておらず。地域や学校によって「音読」と

「黙読」どちらで教育するのか、方針は違っている。

ジルは「音読」が教育方針の学校にいて、エミリオは「黙読」が教育方針の学校にいたことから、二人の読書習慣の違いが出たのである。

しかし、この場にはメイベルはいないので、ジルとエミリオの疑問は解けることはなく、二人も特に解こうとしなかったので、この話題はこの場限りのものになった。

列車はイストム地峡を越えて、海沿いの線路を走って行き、サンルミネに到着した。

メルカトル鉄道はサンルミネが終点である。

サンルミネは東アルテース公国の首都であり、東大陸を東西に流れる大河アテル川に面している。

アテル川を船で東に向かえば、ラトゥース大洋に出るため、内陸の運河や川を通る船だけではなく、海に出る外洋船もサンルミネの港から出港する。

ジルの買った切符では、サンルミネから外洋船に乗り換えることになる。

サンルミネ駅に列車が止まると、ジルはホームに降りた。

（さあて、港に行くには、どっちに行ったら、いいのかな？）

ジルが案内板をさがしてキョロキョロしていると、後ろの方から聞き覚えのある声をかけられた。

「何をしているんだい？ ジルさん」

ジルが後ろを振り向くと、メルカトル夫人が列車の開いた窓の中にいた。

「メルカトル夫人こそ、何をしているんですか？ 早く列車から降りて、港に向わないと」

メルカトル夫人は一瞬「この男は何を言っているのだ？」という表情になったが、すぐに納得した表情になった。

「ああ。そう言えば、そのこと説明していなかったね。ここでは船に乗り換えるのに列車を降りる必要は無いんだよ」

ジルはメルカトル夫人の言葉の意味が分ならず。きょとんとしていた。

「とにかく、説明は後でするから！ 早く列車に戻りな！ もうすぐ、出発だよ！」

サンルミネ駅を出発した列車は、サンルミネ港に向かった。

列車が港に到着して停車すると、先頭の箱型機関車が切り離されて、列車の最後尾に凸型機関車が連結された。

凸型機関車は連結と切り離しを繰り返して、十四両編成の列車を五両・五両・四両に分けた。

港の栈橋にはレールが敷いてあり、栈橋には船が接岸している。

船には栈橋に向けて大きく開口部があり、船の中に五両の客車が三列に並べるレールが敷かれている。

凸型機関車に押されて、船の中に五両の客車が積み込まれた。

次に、もう一つの五両の客車が積み込まれ、最後に四両の客車が積み込まれた。

「なるほど、これは便利ですね」

積み込まれる列車の中から見ていたジルは、つぶやいた。

「これなら乗客は乗り換えのために歩く必要は無く、列車に乗ったまま船に乗れますね。素晴らしいアイデアです！メルカトル夫人！」

「ま、まあね……」

称賛の声を上げるジルに対して、メルカトル夫人は複雑な表情になった。

実は船の中に線路を敷くことをメルカトル夫人が思いついたのは、乗客の利便性を考えたからではなかった。

最初、メルカトル夫人は普通の船を用意して、乗客には歩いて乗り

換えてもらう予定だった。

しかし船会社組合が、それに「待った！」をかけたのだった。

「乗客を運ぶ船を所有・運航するのは船会社に限る」という規則があるのを持ち出したのだ。

船会社組合としては、メルカトル鉄道の開通で乗客を奪われたことへの意趣返しもあり、横槍を入れてきたのだが、規則上は船会社組合の主張は正当であった。

船会社組合の主張が認められると、メルカトル鉄道は鉄道で運んだ乗客を別会社の船で運ばれることになり、収益が予想より下がることになる。

それでメルカトル夫人は対抗手段を思いついた。

メルカトル鉄道が、鉄道を建設するための車両・資材を運ぶための船を所有することはすでに認められていた。

クリプトン卿を団長とする表敬使節団が、その資材運搬船に乗ったことがあった。

それを「前例」としてメルカトル夫人は乗客を運ぶ船の所有・運航を認めさせようとした。

船会社組合は「前例」があるので無条件で却下するようなことはできなかったが、一つ条件を付けてきた。

「資材運搬船に乗客が便乗することは認めるが、客船の所有・運航

は認めない」というものだった。

船会社組合は資材運搬船では大量の乗客を運ぶのは不可能なため、船会社の客船で乗客を運ぶことになると考えて、その条件を出した。メルカトル夫人は資材運搬船を改造して客室を設けることも考えたが、そうになると「客船」になってしまう。

それで資材運搬船に乗客を乗せたままの客車を積み込めるようにしたのだ。

結果的にこの方法は評判が良く、海・湖・川を渡る「鉄道連絡船」に後に採用されるようになり、メルカトル夫人は「鉄道連絡船の母」と呼ばれるようになる。

ジルたちの乗る船は、帝都サクラスのふもとにあるポルタワの港に到着した。

ポルタワから水力列車で帝都サクラスに向かうことになる。

水力列車は水車で線路の下にあるケーブルを動かし、それをつかむことで列車が動く仕組みである。

水力列車は南アルテースで機関車が發明される以前からあるのだが、ジルにとっては初めて見る物であり、機関車に牽引されていない列車はジルにとって却って珍しかった。

港には大勢の出迎えの人々がいた。

人々は名前を大きく書いた紙を掲げて、船から降りる人への目印にしている。

ジルは出迎えに来る人はいないので、そちらに目は向けなかった。

「ジル・エルラブンダ！ジル・エルラブンダはおられるか？」

ジルの耳に聞き覚えの無い声が届いた。

ジルが声の方を向くと、女神のごとく整った顔立ちをした女性が出た。

「そなたが、ジル・エルラブンダであるのか？」

「はい。そうですが、失礼ですが、あなたは？」

「わらわはフェレラ・コップと申す。人間が竜の山脈と読んでおる山を住み処とする一族の、長老の孫娘じゃ。ジル殿に頼みたいことがあるのじゃ」

第九章 サクラス行き普通列車 その5 (後書き)

感想・評価をお待ちしております。

第十章 マウンテン・ドラゴンの鉄道旅行 その1

帝都サクラスに向けて、四体のマウンテン・ドラゴンが飛んでいる。

一体は竜の山脈で暮らすマウンテン・ドラゴンの長老カーム・コップで、一体は若頭、残る二体は随行員の若いドラゴンである。

カームたちはサクラス帝国政府との外交交渉のために、帝都サクラスに向かう途中であった。

マウンテン・ドラゴンと帝国政府との間の交渉のための席は、何度も設けられており、最近ではマウンテン・ドラゴンの長老であるカームが直接何度も帝都サクラスに赴いている。

これは外交儀礼上、かなり無礼なことである。

長老であるカームは言わば国家元首であり、国家元首を一方的に帝都サクラスに呼び付けている形になっているからだ。

本来ならばサクラス帝国の国家元首である大司教が、マウンテン・ドラゴンの本拠地である竜の山脈を訪問するか、帝都サクラスと竜の山脈の中間地点に会談の場を設けるべきだからである。

もちろん。これには理由がある。

サクラス帝国における多数派であるソルティス教徒は以前は、マウンテン・ドラゴンを熊や虎などと同じ凶暴な野生動物としか、最近まで思っていなかった。

しかし実際にはマウンテン・ドラゴンとは人間と同じ言葉を話し、文字を使い、道具を使う知的生命体であることが、勇者ナバルと当時は従者であったメイベルの救世の旅によって判明した。

そのため帝国政府は直ちにマウンテン・ドラゴンとの友好関係を結ぶことにした。

それに伴い帝国の法律上は、マウンテン・ドラゴンの住む竜の山脈は「外国の領土」という扱いになり、マウンテン・ドラゴンは「外国人」ということになった。

以前は法律上、竜の山脈は帝国の領土であり、マウンテン・ドラゴンは野生動物であったため、法律を変えないと帝国の人間が竜の山脈に侵入してマウンテン・ドラゴンに犯罪を行ったとしても、何ら罪に問えないからである。

帝国では「外国人」の国内での行動は基本的に自由である。

そのためマウンテン・ドラゴンは帝国内を自由に旅行できる。

その時、問題が発生すると考えられたのが「マウンテン・ドラゴンが凶暴な野生動物などではなく、知的生命体である」という知識が浸透していない一般人に関してである。

例えば、ある町に一体のマウンテン・ドラゴンが見物のために降り立った。

それを見た町の住民が恐怖のあまり、反射的に攻撃したとする。

一般人の持つ武器でマウンテン・ドラゴンを殺害可能な物は無いが、

町の住民は「傷害未遂」か「殺人未遂」の罪に問われることになる。

このようなドラブルを避けるためには、一般人にマウンテン・ドラゴンに慣れてもらうことが必要である。

その第一歩としてマウンテン・ドラゴンの外交使節団に頻繁に帝都サクラスを訪問してもらい。帝都の住民にマウンテン・ドラゴンに慣れてもらうように帝国政府は要請したのだった。

カームは要請を快諾した。

固体によっては体長が十メートル以上あり、鋭い爪と牙を持つマウンテン・ドラゴンが、最初に帝都に飛来した時には住民はパニックに襲われたが、回数を重ねた今は珍しい光景を見る程度に落ち着いている。

「今日は、どんなご馳走が出るのか楽しみです。若頭」

随行員の若いドラゴンの発言に、若頭が厳しい顔を向けた。

「俺たちはご馳走を食べるために、帝都サクラスに行くのではないぞ！ 帝国との重要な外交交渉のためなんだ！ その自覚をきちんと持て！」

「でも、若頭は向こうが用意してくれた料理をいつも美味しそうに食べて、食べる量も一番多いそうじゃないですか？ ボクたち随行員は若いドラゴンの仲間たちが交代なので、毎回は行けないのに、若頭ばかり長老の御供で毎回行って人間の作った料理を食べているなんてズルいですよ」

「そ、それはだなあ……。俺は長老の補佐役なのだから、毎回行くのは当たり前だろ。それに歓迎のために向こうが出してくれる料理を残すのは失礼だから、俺は全部食べているんだ」

人間は毎日三度の食事が必要だが、ドラゴンは魔法を使って体力を消耗しなければ、半月に一度の食事が普通である。

そのため調理法に関しては、人間に対してドラゴンの技術は発達しなかった。

ドラゴンにとって自分たちの料理より美味しい人間の料理を食べることは、大きな楽しみになっているのである。

「ふむ。やはり、こちらを見ているのう」

カームは若頭と若いドラゴンが会話をしている間も、油断無く地上を見ていた。

カームたちはかなり高い高度を飛んでいるのだが、ドラゴンの驚異的な視力は、地上にある人間の小さな村の教会の屋根の上にいる一人の人間の男がはっきりと見えていた。

その男はカームたちを望遠鏡で見しており、帝国軍の軍服を着ている。

「事前に通告のあった。ドラゴン四体が、帝都サクラス方面に向けて飛行中！」

屋根の上にいる男の報告は、直ちに電信によって帝都サクラスに送られた。

帝都サクラスの防衛責任者である近衛隊長は電信文を受け取ると、命令を口にした。

「帝都の防衛レベルを最大に上げる！全部隊は戦闘準備！」

帝都サクラスを囲む防壁の上に設置されている対ドラゴン用の対空砲であるドラゴンには砲員が砲弾を装填して、いつでも砲撃可能な状態にした。

剣士隊や槍隊は、それぞれ剣や槍を持って帝都の各地に分散して持ち場についた。

近衛隊の対マウンテン・ドラゴンの戦闘マニュアルでは、まず空中にいるドラゴンをドラゴン砲で攻撃して、傷ついて地上に落ちたドラゴンを鱗の隙間を狙って剣や槍で突き刺して、止めを刺すことになっているからである。

しかし、帝国政府は自分の方からドラゴンとの戦争を始める気はない。

あくまで、ドラゴンとの外交交渉が決裂して直ちに開戦という事態になった場合に備えているだけである。

マウンテン・ドラゴンが帝都に滞在している間は、警戒レベルは常に最大である。

そのことはマウンテン・ドラゴンにも通告しており、ドラゴンの側でも警戒すること自体は同然のこととと思っているので、気を悪くすることは無い。

結局は、サクラス帝国とマウンテン・ドラゴンとの間には、友好関係が継続したため「警戒」が「戦闘」になることはなかった。

「ところで、長老。先に帝都に行っているフェレラの方は、上手くいってますかね？」

若頭が自分のことから話題をそらそうとして、長老に話し掛けた。

「うむ。孫娘は人間との交渉に、わしらの中では最も慣れておるかな。大丈夫であろう」

そしてカームは笑って、冗談を言う口調になった。

「それに孫娘が人間に変身している姿は、人間から見ると美女だそうだ。ジルという人間は男だそうだから。美女からの頼みは断れない」

同じ頃、ジルとフェレラは帝都サクラス内にある喫茶店で話し合っていた。

ジルは妻のレビーを心から愛しているので、フェレラの人間に変身した美女顔を見ても心が動かされることは無かった。

ジルは、あくまで自分の仕事の話として進めていた。

「駅弁を私に作って欲しいのですか？フェレラさん」

「そうじゃ。わらわたちマウンテン・ドラゴンは今度、鉄道で旅行をすることになってな。列車内で食べる駅弁を、ジル殿に作って欲しいのじゃ。もちろん。代金はお支払する」

「ドラゴンが列車で旅行！？失礼ですが、体が大きくて列車に乗ることは、できないのでは？それとも他のドラゴンさんたちもフェレラさんのように人間に変身できるのですか？」

「人間に変身できる魔法が使えるのは、今のところ、わらわだけじゃ。メイベルが、わらわたちのためにドラゴン専用車を作ってくれたのじゃ」

「それなら、駅弁も聖女さまに作ってもらえば……」

フェレラは首を横に振った。

「それでは意味が無いのじゃ。駅弁屋で作ってもらわなければ、それは『駅弁』とは呼べないじゃろう？」

「なるほど」

ジルは黙り込んで、考え込む表情になった。

数分間、ジルが黙り込んだままになったので、フェレラは不安になった。

「どうしたのじゃ？わらわたちのために駅弁を作るのは、嫌なのかの？」

ジルは慌てて首を横に振った。

「いいえ。嫌などではありません。駄弁のご注文受けさせていただきます」

「それでは何を考え込んで、おったのかの？」

「具体的に、どんな駄弁を作るのか考えていたのです」

フェレラは不思議そうな顔になった。

「人間が食べている駄弁をたくさん作ってくれば、それで良いのじゃが……」

「それでは駄目です！」

ジルは力強く主張した。

「駄弁は一つの弁当箱の中に全てのオカズが入っていて、一つの弁当でお客さんを満足させる物でなければ、ならないんです！」

フェレラはジルの主張に圧倒されながらも答えた。

「それは、わらわたちドラゴンに合う大きな弁当箱を作るといふことかの？」

「そうですね。聖女さまにドラゴンさんたちの手に合うサイズの大きな弁当箱を作ってもらいましょう。それと、もう一つ考えなければならぬことがあります」

「それは何かの？」

「駅弁のオカズの内容です」

「それなら人間用の駅弁と同じ物にしてくれれば……。ああ。シャーマの球根と果肉は無しにしてくれるかの。わらわたちドラゴンが食べると気持ち悪くなるからのう」

「シャーマのことは分かりました。ですが、私が言いたいのとは別のことです」

「何かの？」

「ドラゴンさんたちのことを、私は遠目にしか見たことないんですが、私たち人間の歯と違って鋭い牙ですよね？」

「そうじゃが……」

「そうすると、歯ごたえが人間とはかなり違うと思うんですよ。舌で感じる味覚だけでなく、歯ごたえのことも考えて料理を作りませんか」

フェレラは正直ジルのことに感心していた。

（メイベルでも、そこまで考えて、わらわたちに料理を出してはいなかったみたいだからのう）

「すみません。フェレラさん。ドラゴンの姿に戻って、手の大きさと牙を見せてくれませんか？」

フェレラは戸惑った。

「いや。急に変身を解くと、身体が冷えて動けなくなるのでな……。そうじゃ！ お爺上も帝都に来ているはずじゃ！」

「じゃあ。フェレラさんのお爺さまの所に案内してください」

フェレラはジルを抱えて飛び上がった。

第十章 マウンテン・ドラゴンの鉄道旅行 その1 (後書き)

ご感想・評価をお待ちしております。

第十一章 マウンテン・ドラゴンの鉄道旅行 その2

ジルは帝都サクラスに来るのは初めてで、地理は全く分からない。

そのためフェレラに抱えられて、飛んでいても帝都のどこに向かっているのか、見当がつかなかった。

「あの。すみません。フェレラさん。私たちはどこに向かって飛んでいるんですか？」

「決まっておる。わらわのお爺上の所じゃ」

「そうではなくて、帝都のどこかと……」

「おっ！見えてきたのじゃ！前に見えるのが、わらわのお爺上たちじゃ！」

マウンテン・ドラゴンの巨体が数体、ジルの視界に入って来た。

その中で一番大きなドラゴンの前で、フェレラは着地した。

「お爺上。駅弁屋さんのジル・エルラブندا殿を連れて参りました」

ジルはマウンテン・ドラゴンの長老であるカーム・コップの前に、立つことになった。

ジルは、空を飛ぶのが初めての経験で興奮していたが、その興奮がさめないままに、体長十五メートルのカームの足下で、その巨体に圧倒されていた。

ジルが何も言えないでいる内に、横でフェレラがカームに説明していた。

「……というわけで、ジル殿は、わらわたちマウンテン・ドラゴンの手や口の中を詳しく見たいそうじゃ」

カームはうなづいた。

「駅弁のために、必要ならば存分に見てくれ。ジル殿」

カームは、ジルに向けて片手を差し出した。

体格の割りには小さな手ではあるが、手のひらは人間二人がギリギリ乗れるぐらいの大きさであった。

大きな手に、鋭い爪が生えてる。

その鋭い爪は、ジルの恐怖心を煽った。

（聖女さまや勇者さまが、ドラゴンさんの手のひらの上に乗っているのを見たことがあるが……。よく平気でいられるものだ。握り潰されでもしたら、一溜まりも無い！）

今までジルは遠目でしかドラゴンを見たことがなく、間近で見た場合に、こんなに恐怖を感じるとは思っていなかった。

しかし、自分から言い出した以上避けるわけにはいかないの、細かく手を観察した。

「見終わりました。カームさん。ありがとうございました」

ジルが声をかけると、カームは手を引っ込めた。

鋭い爪が生えた巨大な手が離れたので、ジルは安堵した。

ほっとしているジルの隣から、フェレラの声が聞こえてきた。

「お爺上。手の次は、口の中をジル殿に見せるのじゃ」

「おお。そうであったな」

カームは口を大きく開けると、ジルに向けて体を屈めた。

（く、食われる！）

カームの大きな牙の生えた口を目前で見ることになったジルは、反射的にそう思ってしまい、恐怖で体が硬直して動けなくなってしまった。

「何をしておるのじゃ？ ジル殿。口の奥の方も見ねば、奥歯の状態が分からぬではないか」

ジルが恐怖で動けなくなっているとは分からないフェレラは、ジルの体を持ち上げると、ジルの頭をカームの口の中に突っ込んだ。

ジルは恐怖のあまり、悲鳴も上げられなかった。

（俺はドラゴンに食われて死ぬのか……。妻よ……。娘よ……）

ジルは、パニックのまま家族への別れの言葉をつぶやいた。

「ジル殿。もう良いか？お爺上の顎が疲れてきたようじゃ」

ジルを抱えているフェレラの言葉に、ジルは冷静さを取り戻した。

本来の目的を思い出して、周囲を素早く観察した。

「もういいですよ。フェレラさん。出してください」

フェレラは、ジルをカームの口の中から抜き出した。

「それでは、フェレラさん。サンウーヌスに帰ってから、聖女さまと相談して具体的にどんな駅弁を作るのか決めますので」

「うむ。楽しみにしておるぞ」

地面に立ったジルは、ここでもうやく周囲の様子を見る余裕ができた。

高い塀に囲まれた中庭のような所であった。

たくさんのテーブルが並べられて、その上にたくさんの豪華な料理が載せられており、その周りには高級な服装をした大勢の男女がいた。

大勢の男女の視線は、ジルに集まっていた。

ただの一市民にすぎない自分が、この場にはどう考えても場違いに思えて、ジルはフェレラに質問した。

「あのすみません。フェレラさん。ここは、どこなんですか？何だか偉そうな人たちが大勢いますけど？」

フェレラはあっさりと、何でもないことのように答えた。

「サクラス帝国の大司教であり皇帝でもあるサンクトゥス八世殿の宮廷の中庭じゃ」

ジルは驚いた。

「えっ！？何で、そんな所に私を連れて来たんですか？」

フェレラは不思議そうな顔になった。

「お爺上の所に案内してくれと言ったのは、ジル殿であろう？お爺上は大司教殿に歓迎会を開いてもらっているところなのじゃ」

「えっ！？それじゃあ。大司教さまや帝国議会の偉い人たちが、ここにいるんですか？」

「当たり前じゃ」

ジルはさっきとは違う意味で、恐怖に襲われた。

（どうしよう。大司教さまの宮廷に侵入したとなれば、逮捕されてしまうのだろうか？）

ジルに一人の人間の男が近づいて来た。

男は、にこやかな笑顔でジルに話しかけた。

「ドラゴンさんたちと、かなり親しいようですが、お名前をお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

男は自分の名前は名乗らなかったが、ジルには一目見ただけで男が何者か分かった。

男は立派な僧服を来ており、そのデザインの僧服を着ることを許されているのは、サクラス帝国でただ一人大司教のみである。

「私はジル・エルラブンダと申します。西アルテースのサンウーヌで駅弁屋をやっております」

「駅弁屋？それでは、あなたは普通の一般市民なのですね？」

何故か大司教は、他の人間にも聞こえるように大きな声で言った。

「その通りでございます。大司教さま」

その会話を聞いた中庭にいた大勢の人たちが、ドラゴンの方に動き始めた。

「感謝しますよ。ジルさん」

大司教は他の人間に聞こえないように、ジルに小さな声でつぶやいた。

「あの……。私は、大司教さまに感謝されるようなことは、何も……」

「何を言っているのですか、ドラゴンさんの爪や牙に平然と近づいていたではないですか」

内心は激しい恐怖に襲われていたとは言えないでいるジルに、大司教は話を続けた。

「メイベルやクリプトン卿のようにドラゴンと平然と付き合える人もいますが、たいていの人間にとって、あの大きな爪と牙には恐怖を感じるので、近づくこともできない人がほとんどなのです」

大司教は周りを見回した。

「この歓迎会でも、人間とドラゴンの親睦を深めるために立食パーティにしたのに、ドラゴンさんたちとは、みんな距離を開けてしまうので困っていたところでした」

大司教は視線をジルに戻した。

「ですが、普通の人間であるあなたのドラゴンに対する態度を見て、みんな恐怖を感じる必要が無いと分かったようです」

ジルには全く自覚は無かったが、このことがサクラス帝国の人間とマウンテン・ドラゴンの友好関係を前進させる大きな一歩となった。

それから数週間後、ジルはサンウーヌス駅のホームに立ち、いつものように駅弁を売っていた。

ただし、今日売る駅弁には、いつもと違う物が数個用意されていた。ホームに列車が入って来た。マウンテン・ドラゴンの住む竜の山脈の最寄り駅ヴァレーを出発した列車である。

この列車は定期列車であるが、最後尾にはいつもと違う車両が連結されていた。

メイベル専用のお召し車両と、ドラゴン専用の屋根の無い無蓋車が二両だ。

メイベルは、ここサンウーヌス駅からお召し車両に乗るが、ドラゴンたちはすでにヴァレーからドラゴン専用車両に乗り込んでいる。

ドラゴン専用車両に乗っているのは、カームと若頭に若いドラゴンが二体、それと本来のドラゴンの姿でいるフェレラとパゲトンであった。

ジルは大きな弁当箱を、ドラゴン専用車両に向けて運んだ。

弁当箱はドラゴン専用調理された駅弁である。

駅弁一つで、マウンテン・ドラゴンが満腹になるだけの量が詰め込まれており、大きく重いため、人間一人の力では運ぶことは不可能である。

そのため、メイベルが倉庫などでの荷運び用に開発したフォークリフトをジルは操作して、駅弁をホームで運んでいる。

「駅弁を買う時は、駅弁と交換にジル殿にお金を渡すのじゃ」

フェレラが他のドラゴンたちに、駅弁の買い方を説明していた。

ジルはフォークリフトで駅弁をドラゴンたちに渡して、代金を受け取った。

「いただきますだの」

パゲトンが早速駅弁のフタを開けて、食べようとしている。

「こらっ！パゲトンちゃん！！まだ開けては、駄目じゃ」

フェレラがパゲトンを止めた。

「駅弁というものは、走っている列車の中で、外の景色を眺めながら食べるものなのじゃ。列車が走るまで待つのだじゃ！」

発車時刻となり、列車は予定通り出発した。

ジルは駅のホームで見送った。

「おお。これはなかなか快適であるな」

列車に乗るのが初めてのカームたちは、とても楽しんでいる。

「フェレラ。もう食べてもいいかの？」

以前列車に乗った経験のあるパゲトンは、駅弁の方が気になってい

る。

「パゲトンちゃん。まずは、駅弁のフタを開けるのじゃ」

パゲトンは駅弁のフタを開けて、箸をつけようとした。

「食べるのは、まだじゃ！」

フェレラもフタを開けると、中身をじつくりと眺めた。

「駅弁は食べる前に中身を確認めて、どのようなペース配分で食べるのか、決めておかなければならないのじゃ。いつものメイベルのパーティーの時のように、バクバク食べてしまつて足らなくなつても、お代わりは貰えないのじゃ」

パゲトンたちは食べ始めた。

「おおお、これは本当に美味しいだの！」

そこに隣のお召し車両から、メイベルとナバルが来た。

「美味そうだな。俺にも少し味見させてくれ」

ナバルは、駅弁の中のカモ肉の唐揚げにフォークを刺そうとした。

人間用ではカモ肉を一口サイズに切つてあるが、このドラゴン用駅弁では一羽丸ごと唐揚げにしてある。

ナバルの刺そうとしたフォークは、唐揚げの表面で弾かれた。

「なんだ、こりゃ！？固い！」

「そりゃそうよ。ナバル」

メイベルは笑って言った。

「これはドラゴンさんたちの鋭い牙で噛み切れるような固さにしてあるんだもの。人間だったら噛み切れなくて食べることはできないわ」

ナバルがドラゴンたちの方を見ると、満足そうな表情で駅弁を食べている。

「歯ごたえがあって旨いのう」

「まったくだ。以前食べた人間の料理も旨かったが、やわらか過ぎたからな」

「弁当箱の大きさも、自分たちの手の大きさにちょうど良い。人間の皿では小さ過ぎて持ちにくかったからな」

ドラゴンたちにとって鉄道旅行は楽しく、駅弁は好評であった。

しかし、ドラゴンにとっては移動の手段としては、自分で飛ぶ方が速いため列車に乗ったのは、この一回だけであった。

ジルのドラゴン用駅弁も、この一回だけかと思われたが、次の機会は誰も思いもしなかった形で訪れることになる。

第十一章 マウンテン・ドラゴンの鉄道旅行 その2（後書き）

ご感想・評価をお待ちしています。

次回が最終章の予定です。

最終章 駅弁王

サクラス帝国と東大陸のドラゴン皇帝との世界大戦が終戦して数年後、ジル・エルラブنداは忙しく働いていた。

と言っても、厨房で駅弁を作っているわけでも、サンウーヌ駅のホームで駅弁の立ち売りをしているわけでもない。

地上十階建てのビルの最上階にある社長室で、社長の決裁が必要な書類にサインをしている。

「ええい！何で俺がサインしなければならない書類がこんなにたくさんあるんだ！」

「ジルさまがエルラブندا駅弁製造販売株式会社の社長だからです」

社長室にいる男性秘書が答えた。

「ああ、サンウーヌ駅のホームで駅弁の立ち売りをしていた頃が懐かしい……。あの頃は何かもみなものんびりしていた良い時代だった」

「ジル社長。また、そんな愚痴をおっしゃって……。ジル社長が駅弁の製造販売を始められたばかりの頃は、聖女メイベルさまがサラス帝国全土に鉄道網を建設し始めた頃で、それまで都市間の移動には馬車や運河で数日かかっていたのが、鉄道で数時間になって社会全体がスピードアップの時代を迎えたんです。その時流に上手に乗って、ジルさまは小さな食堂から、ここまでの大きな会社の社長になることができたんです」

「まあ、そりゃそうだがなあ……」

ジルは男性秘書の言葉に同意したものの、うんざりとした表情は変えなかった。

「駅弁をつくるのを始めたのは俺だが、聖女メイベルさまの言う通りに自動調理器を導入して、勇者ナバルさまが投資してくれるって言うから受け入れたら、いつの間にか、俺は大きな会社の社長になっていた」

ジルは、ため息を吐いた。

「聖女さまが『いつの間にか大統領になって、いつの間にか女王になってしまった』と口癖のようにおっしゃられているが、お気持ち分かるよ」

大きなサイレンの音が鳴った。

ビルの隣にある工場が出した音であり、正午の昼休み時間を知らせるサイレン音であった。

「おっ！社長になってから、仕事中に一番楽しい時間だ」

ジルは立ち上がると、早足で広い社長室のドアの前まで行った。

「工場の方に行って来る！」

「いってらっしゃいませ」

ジルは社長室から出て行った。

社長室に残った男性秘書は、周囲を用心深く見回してから電話を掛けた。

「もしもし、私です。お食事中でしたか……。お食事中のところ失礼いたしますが、急いでご報告したいことがあります……。」

男性秘書は再び用心深く周囲を見回して、声を潜めた。

「あのジルという男、平凡以下です。馬鹿です。愚か者と言うべきでしょう」

男性秘書の口調には、先ほどまでのジルに対する礼儀正しさは全く無く、多量の侮蔑が含まれていた。

「私が作成した書類を全く読まずにサインをしています。と言うより、読んだとしても理解できないでしょう」

男性秘書は一度深呼吸をすると、本人にとって重大な提案を口にした。

「以前、私が提案したように、ジル個人が大部分を所有しているエルラブンダ駅弁製造販売株式会社の株式の購入を持ちかけましょう！それが何を意味するかも分からずに、大金を提示すれば簡単に応じるでしょう！そうすれば経営権を奪えます！そうすれば……」

男性秘書は、電話の相手の返事に戸惑った。

「えっ！？ジル本人だけではなく、その周囲をしつかりと見ろと！

？それはどういう意味で？いえ……、失礼いたしました。お言葉に従います」

男性秘書は、電話の相手が目の前にいるかのように深く頭を下げた。電話を切ると、男性秘書はさっきまでジルが座っていた社長の椅子に近づいた。

（この椅子に座るのにふさわしいのは、メルキアの秘術である簿記を習得した私のような人間なのだ。もっと効率良く会社を運営して利益を上げることができるのは、私だ。ジルのようなただ時流に乗っただけの人間など社長の椅子にふさわしく無い）

世界大戦が終了した後、サクラス帝国では経済発展が順調に続いていた。

かつては、サクラス帝国で出世するためには宗教指導者や剣士になることを目指す若者が多かったが、最近ではメルキアで開発された資産の管理方法を身につけて、経済的成功を目指す男性秘書のような人間が多くなっていた。

そんなことを自分の秘書が思っていることも知らずに、ジルはビルの隣にある工場の中にいた。

広大な敷地にある工場の中では、さまざまな種類の駅弁が製造されている。

最近では駅弁だけでなく、メイベルが開発した冷凍食品やインスタント食品の製造もしており、サクラス帝国全土で販売されている。

工場では新たな製造ラインが設置されており、そこで製造された新製品の試作品第一号の前にジルは立った。

試作品は駅弁であり、ジルの他に数人の会社の人間が試食のために口に入れた。

「何だ！？ 堅すぎる！！」

「これじゃあ、堅すぎて、噛めませんよ！ とても食べられません」

試食した人間のほとんどが否定的な意見を出す中で、ジルだけが満足そうにうなづいていた。

「うん。これで良い。これならお客さまに満足していただけるだろう」

社員たちが驚愕の表情をジルに向ける中で、ジルは冷静に答えた。

「みんな忘れるんじゃない。これは人間が食べるための駅弁じゃない。西大陸から大陸間横断鉄道で公用・商用・観光のために来られるフォレスト・ドラゴンさんたちが食べるための弁当なんだ。ドラゴンさんたちの歯は鋭い。これぐらい堅いのがちょうど良いんだ」

東大陸と西大陸を結ぶ大陸間横断鉄道は、世界大戦中から建設が進められていた。

東大陸と西大陸を結ぶ交通機関として以前からある物としては、船と飛行機がある。

船は大量輸送能力では一番ではあるが、スピードは一番遅い。

飛行機はスピードでは最も速いが、輸送できる量は少なく、マウンテン・ドラゴンやフォレスト・ドラゴンが乗ることは不可能である。

東大陸に生息しているマウンテン・ドラゴン、西大陸に生息しているフォレスト・ドラゴンは、それぞれ自分の住む大陸の中では自力で飛べるが、東大陸と西大陸の間は、ラトウス大洋とアルゴン海の二つの広大な海によって隔てられているため、ドラゴンが自力で飛んで移動するのは不可能なのだ。

正確に言うと、東大陸と西大陸は北と南で陸橋で地続きになっている。

しかし、北の陸橋は氷に鎖された酷寒の丘陵地帯、南の陸橋は海岸近くまで山脈が迫った険しい土地であり、探検目的ならともかく、一般的な交通路としては困難な土地であった。

特にドラゴンは変温動物のため、暑すぎても、寒すぎても、活動が不可能になってしまうため、北と南どちらの陸橋も通ることはできなかった。

そのためドラゴンが大陸間を移動するには、船を使うのが唯一の方法になっていた。

東西両大陸の交通を促進するために、北の陸橋には大陸間横断道路が完成している。

ドラゴンにとって北の陸橋が活動可能な気温になる夏季だけではあるが、足蹴り自転車を使って片道一ヶ月で大陸間の移動が可能になった。

さらに大陸間横断鉄道が暫定開業することになっている。

北の陸橋における鉄道の敷設は難工事のため、全線鉄道開通の正式開業はまだ先であるが、鉄道未開通区間は足蹴り自転車を使うことで、片道十三日の移動が可能になる。

その大陸間横断鉄道を利用するドラゴンのための駅弁を、ジルの会社が製造販売することになったのだった。

ジルは過去に一度マウンテン・ドラゴンのために駅弁を作ったことがあり、その実績を評価されたのだった。

数日後、暫定開業した大陸間横断鉄道を利用して数体のフォレスト・ドラゴンが西大陸から東大陸に移動していた。

その内一体は、大学頭であるコーチュンであった。

西大陸を統治する西大陸連合体の国家元首であるバリャン大陸会議議長に次ぐ重要人物……、いや重要ドラゴンである。

サンウーヌスで行われる聖女メイベルと勇者ナバルの結婚式に、バリャン議長の代理として出席するのが旅の目的である。

大学頭は、途中の駅のホームで販売されていたジルの会社が製造した駅弁を買って食べた。

「ジル社長！大変です！」

「どうしたんだ？そんなに慌てて？」

ジルが本社ビルの十階の社長室で仕事をしていると、社員の一人が部屋に飛び込んで来た。

「ジル社長！とにかく、外の門の所を見てください！」

本社ビルと工場がある広大な敷地は、塀で囲まれている。

正門と裏門があるが、正門の所に一体のフォレスト・ドラゴンがいた。

「あのドラゴンさんが、どうかしたのか？」

「何故かは分かりませんが、かなり興奮していて『この城の王に会わせろ』と言っているんです！」

「ここは城ではないし、ここには王はいないぞ。とにかく、私が行ってみよう」

数分後、門の所でジルとドラゴンは向かい合っていた。

「おぬしがこの城の王であるか？」

ドラゴンは訛りのあるサクラス帝国語で尋ねた。

ジルは首を横に振った。

「いいえ。ここは城ではありません。ここはエルラブンダ駅弁製造販売株式会社の本社ビルと工場です。私は社長のジル・エルラブンダです。どういった御用でしょうか？」

「社長……？社長とは何であるか？」

ドラゴンは「社長」という言葉の意味が分からないらしく、尋ねた。

「会社で一番偉い人ということですよ」

「一番偉いのならば、やはり王ではないか、駅弁王に言わねばならぬことがある」

「为什么呢？」

「おぬしの作った駅弁を買って食べた。とてもやばい味だった。その仕返しに来た」

ジルと一緒にいた男性秘書は、腰を抜かしてしまい。声を出すことも動くこともできなくなってしまった。

（ジルの作った駅弁は、そんなに不味かったのか……。怒ったドラゴンが本気になって暴れば、ビルも工場もあつという間に破壊されてしまう。その再建にかかる費用は莫大に……。いや！それより、巻き込まれて、私が死んでしまえば、元も子も無い）

男性秘書が内心で、そう思っていると、自動車が近づいて来る音が

聞こえてきた。

「あーっ！大学頭さん。サンウーヌス駅に着くなり、ジルさんの会社の場所を教えろと言うんで、教えたら、いきなり飛んで行っちゃうから、何事かと思ったわよ！」

声は自動車の助手席に座っているメイベルの物であり、自動車を運転しているのはナバルであった。

メイベルが大学頭と言葉を交わした。

「大学頭さんは、サクラス帝国語をまだよく分かっていないから、言葉を間違えたみたいね。訂正するわ」

メイベルが解説を始めた。

「とてもやばい味だった。その仕返しに来た」の「やばい」は「素晴らしい」ということで、「仕返し」は「お礼」ということだった。

つまり「とても素晴らしい味だった。そのお礼に来た」と大学頭は、言いたかったのだ。

ジルはメイベルの説明に納得したが、疑問を一つメイベルに質問した。

「何故？大学頭さまは、私のことを『駅弁王』なんて呼ぶんですか？」

「大学頭さんの住んでいる西大陸では、これだけ広い敷地で大きな建物と言えば、王様のお城ぐらいだわ。そこの一番偉い人だから『駅弁王』と呼んでいるのよ。」

危険は無いと分かって安心した男性秘書に、ナバルが近づいた。

二人は、メイベルとジルに聞こえないように、言葉を交わした。

「ジルさんはメイベルと同じように『王』としての才能を持っているんだ」

ナバルの言葉に男性秘書は驚いた。

「どこがですか？聖女さまは多才な方ですが、ジルのできることと言えば駅弁を作ることだけ……」

ナバルは男性秘書の言葉を遮った。

「お前は俺の下で、ソロバンと簿記を教えたが、それ以外のことも学んで欲しくて、ジルさんの秘書にしたんだ。電話でも言ったらう？ジルさん本人だけではなく、その周囲を見ろと」

男性秘書がジルの会社の買収を持ちかける電話をした相手は、ナバルだった。

「よく見ろ。ジルさんの周囲には、今、メイベルと大学頭さんという重要人物と重要ドラゴンがいる。ジルさんが助けが必要になるようなことがあれば、どちらも協力してくれるだろう。そんなふうに入やドラゴンの力を結集して一つの大きな力にできる力をメイベルは持っているし、ジルはメイベルよりは小さいが、同じ力を持っているから『王』なんだ。間違いないジルさんは『駅弁王』だよ」

ナバルの言葉を受けて男性秘書は、それまでとは異なる視線でジル

の姿を見つめたのであった。

最終章 駅弁王（後書き）

「くじびき勇者さま 外伝 誰が駅弁王だ!？」は、これで完結になります。

これまで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7369n/>

くじびき勇者さま 外伝 誰が駅弁王だ！？

2011年6月24日06時31分発行